

支え合いマップづくり

＜インストラクター用マニュアル＞

取り組み課題 の見つけ方

＜2017年/7月改訂版＞

住民流福祉総合研究所＜木原孝久＞

〒350-0451 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1476-1

電話 049-294-8284

ホームページ <http://juminryu.web.fc2.com/>

本冊子の趣旨と活用法

本冊子は、住民と一緒に支え合いマップづくりをする福祉関係者のためのマニュアルである。主として支え合いマップ・インストラクター・セミナーの際の講義資料として使用している。入門編は別の冊子（「**支え合いマップ入門**」本研究所のホームページからダウンロードできます）に譲って、本冊子では聴取のあり方や聴取の内容、取り組み課題(問題と解決策)の抽出法に絞ってある。



マップ作りの技術は日々、進化している。その時点で最新の情報やノウハウを得るためには、表紙の〈〇〇年〇月版〉の最新版を求めている。今回は、最も重要と思われるポイントだけを簡潔に述べるにとどめた。



マップ作りと地域福祉の関連については、本冊子では取り上げていない。それについては新たに「**ご近所発の地域福祉**」（本研究所のホームページでダウンロード可）をまとめたので、そちらを読んでいただきたい。



マップ・インストラクター研修では、本冊子と「支え合いマップ入門」、「ご近所発の地域福祉」（講義資料版）、「聴取項目集」等を教材として使用することになる。

◇目次◇

- ＜序章＞ **聴取とは？ / 4**

 - 1.聴取は総合力の勝負
 - 2.その人のレベルなりに「成功」
 - 3.目指すは強力なご近所福祉づくり
- ＜第1章＞ **聴取の基本的な心構え / 7**

 - 1.聴取に5つの悪条件
 - 2.悪条件を乗り越える5つの努力
 - 3.聴取が成功するための基本条件
 - 4.取り組み課題が出てくる聴取法
- ＜第2章＞ **住民の関わり合いさがし / 17**
- ＜第3章＞ **問題さがし / 22**

 - 1.問題さがしの基本的な心構え
 - 2.「気になる人」さがし
 - 3.問題が出てきそうな「気になる対象」
 - 4.こう考えたら「問題」は見えてこない
 - 5.ダイヤグラムでその人らしさを測定
 - 6.地域の「気になること」
- ＜第4章＞ **解決策さがし / 40**

 - 1.これはまだ「解決」ではない
 - 2.解決策さがしの基本的なあり方
 - 3.マップによる問題解決の枠組み
 - 4.解決策を住民流で練り直す
 - 5.担い手主導・推進者主導は改める
 - 6.「その人らしく」応援型問題解決法
- ＜第5章＞ **課題を圏域ごとに振り分け / 50**
- ＜第6章＞ **「一般化」 / 52**
- ＜第7章＞ **マップづくりのまとめ / 55**

 - 1.まとめの留意点
 - 2.マップで発見した興味深い活動
 - 3.マップで出てきた取り組み課題

<序章>

聴取とは？

1.聴取は総合力の勝負

聴取とは、住宅地図を広げて、住民から様々なことを聞き出し、それを地図上に記入していくことである。この聴取という作業には、福祉に関わる総合的な知識と能力が求められる。

マップ作りで、あなたの福祉に関する総合力が試されるのだ。だから聴取に成功するには、また進歩するには、一つや二つの側面ではなく、さまざまな面からの進歩が求められるのである。以下に、いくつか並べてみよう。

①福祉に関する一般的な、幅広い知識

今の福祉の動向。公私の機関の事業・サービスに関する知識。住民やボランティア等の活動の実態。話題になっている問題。これからの動き。

②マップを作る地域の福祉を含めた各種状況に関する知識

できればマップを作るご近所周辺に関する知識も。

③福祉のあり方に対する自分なりの考え方

一般的知識と共に、自分なりの考え方を持つ。それも福祉の幅広い分野の持論を。

④住民とのコミュニケーション能力

様々な住民と臆せず、話し合いができる資質。考えの違う住民とも率直な議論ができる資質。相手をこちらの方に関心に向けさせる力。

⑤住民を説得、教育する能力

福祉に理解のない人や、偏った考えを持つ人を説得、教育する力。

⑥住民をリードする能力

住民が個々に会話を続けたりしないようリードし、マップ作りを進行する力。

⑦住民から問題を引き出し、解決策を考えさせる力

自分たちの問題について考えることに消極的な住民を説得して、問題や解決策と一緒に考えさせる力。

⑧住民から得たヒントを基に、課題と解決策を抽出する構想力

出てきた解決策を住民に承服させる力。しかも一時間半という時間内に。

⑨出てきた課題に積極的に取り組もうと思わせる力

マップができたなら終わりではなく、出てきた課題に自ら取り組もうという姿勢にさせる力。

2.その人なりに「成功」

マップ作りの目的は、取り組み課題を抽出することである。そのご近所がより良き地域になるために、これからどんなことに取り組んだらいいのか、その課題と解決策を抽出する。

その結果どのような課題が出てきたら成功と言えるのか。その場合の成否を分ける目安はあるのか。じつは、それはない。見方によっては、それぞれが抽出した課題の内容に従って、「それなりに成功」ということができる。「それなりに」ということは、どの人が出した結果も、成功だということだ。正確に言えば、その人のレベルなりに成功、ということである。

マップでどういう取り組み課題が出てくるかは、その人の福祉に関する知識や構想力による。もっと広く言えば、前述の総合力次第で、出てくる課題は大きく違ってくる。その総合力を、今の段階で云々しても始まらない。だからそれぞれが、せいっぱい努力をした結果出てきた取り組み課題なのだから、その人なりに成功と評するより仕方がない。あとは自分なりに、そのレベルを上げていけばいいだけのことである。

3.めざすは強力なご近所福祉づくり

では、何のために取り組み課題を抽出するのか。ここが今、ぐらついている。た

だ、一定の範囲を切り取って、その中の人々のふれあいや関わり合いを探して線を引き、要援護者を特定し、関わり合いの状況を調べる。それでマップ作りは終わり、と思っている人が多い。マップ作りが目的化してしまった。マップは何のために作るのかがぼやけてしまった。

マップ作りは、ご近所福祉を進めるための課題を抽出することである。目的はご近所福祉づくりなのだ。

地域は四つの層からできている。その中の第一層、第二層、第三層への関心は高いが、そのあとに第四層があることが、今の関係者には意識化されていない。

第四層が重要なのは、ここに当事者がいるからである。要援護者は、その身心の状況から、ここから出ることが困難だ。自立生活をするために、ここ（ご近所）の福祉を充実させてほしいと言っている。

しかもここには世話焼きさんなどの人材が豊富である。日常の頼み事ができる隣人もいる。ならばこれらの資源をうまく生かして、ご近所福祉を充実させていけばいい。これが当事者を第一に据えた地域福祉のあり方ではないか。

そのためにはまず、ご近所でどこまで助け合いが行われているかを探らねばならない。しかし住民の助け合いは見えない。見えないように活動しているからだ。そこで支え合いマップの出番になる。マップを作れば、助け合いが可視化する。その結果をフルに生かして、効率的にご近所福祉を作っていけばいい。

というわけで、マップ作りとご近所福祉づくりは密接に結びついている。しかも最近では、介護保険制度が行き詰って、住民の助け合いに対する期待が高まっている。だが、今のような自然発生的な助け合いだけでは心もとない。もっと強力なご近所福祉を作っていかなければならない。どうやったら強力なご近所福祉を作ることができるのか、これが喫緊の課題になっているのだ。

＜第1章＞

聴取の基本的な心構え

1.聴取に5つの悪条件

マップ作りの聴取には、いくつかの悪条件が待ち構えている。その一つ一つを克服していく努力をしなければマップ作りはうまくいかない。

①聴取の時間はわずかに1時間半

-これ以上長いと疲れる。だから一刻も早く相手の懐に飛び込まないと…

②住民と聴取者は初対面

-親しくするには時間が短すぎる。でも仕方がない

③引き出したいのは、住民が話したがらない情報

-ある程度強引にでも聞き出す努力をする必要がある

④住民は必ずしも真剣に地域のことを考えてはいない

-こちらが真剣になっていることをまず相手に分かってもらわねば

⑤日本人の“助け合い拒否型”おつき合いの伝統

-自分のことは知られたくない、相手のことは知ってはならない

つまり、聴取は決して簡単な作業ではないということである。ただ淡々と質問をすれば、素直に答えてもらえるというわけにはいかない。相手はそれほど真剣にこちらの質問には答えてくれない。マップ作りは真剣勝負だと覚悟して挑もう。マッ

プづくりは住民との共同作業であるが、聴取する側とされる側の「闘い」でもある。

■あなたの「おつき合い」の流儀は？

まず自分のおつき合いの流儀を確認するテストをやってみてください。以下の項目で「私もそう思う」というものに○印を、「そうは思わない」に×印をつけます。ここでは○か×かのどちらかに決めてください。さて、あなたは○がいくつ、つきますか。

- | | |
|---|--------------------------|
| ①自分や自分の家族のことは隠しておきたい | <input type="checkbox"/> |
| ②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ | <input type="checkbox"/> |
| ③人に助けを求めるのは苦手だ | <input type="checkbox"/> |
| ④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない | <input type="checkbox"/> |
| ⑤人のことはなるべく詮索 <small>せんさく</small> しないようにしている | <input type="checkbox"/> |
| ⑥誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わないようにしている | <input type="checkbox"/> |
| ⑦困っている人にはお節介と言われないう程度に関わる | <input type="checkbox"/> |
| ⑧引きこもるのにも事情があるから、無理にこじあけるべきでない | <input type="checkbox"/> |
| ⑨お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う | <input type="checkbox"/> |
| ⑩隣人とはあまり深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている | <input type="checkbox"/> |

2.悪条件を乗り越える5つの努力

前述のような悪条件のもとでも、何とか聞きたいことを引き出すには、よほどの努力が必要だ。尋常な聴取では、こちらが聞きたいと思うことは引き出せない。

①住民のフトコロ深く入り込む

—いかにも長い付き合いのような顔をして、相手にぶつかっていく

②「この人、この地域を、何とかしたい！」

—真剣な姿勢を態度で見せる

③聴取の主導権を握り続ける

—こちらの聞きたいことに答えてもらう。無駄な時間を作らない。スピード感をもって。情報を持っている人を早めに把握し、質問を集中させる

④攻撃的聴取

—住民が語りたがらないことも、かまわず質問

⑤教育的聴取

—福祉の目指すものを住民に納得させる。福祉教育をする気持ちで。

⑤の教育的聴取とは何か。地域福祉とは、どんなに要援護状態になっても、住み慣れた家や地域で安全、かつその人らしく生きていけるように、関係者と住民で協働すること。このことを頭に叩き込む必要がある。聴取の間にこのことを忘れてしまったら、とたんに聴取の目標を失うことになるからだ。

住民との話し合いの中でそうした高い目標を提示すると、「そんなのは非現実的だ」という声が出てくる。それでもぐらつかない。福祉の理想をレベルダウンさせるわけにはいかないと毅然としていなければならない。同時に、なぜそんなに高い目標を設定しているのかについて、住民に理解させ、納得させる努力も欠かせない。

3.聴取が成功するための基本条件

①ご近所ごとにマップ作りをする

— 数百世帯の町内を一挙に作るのは厳禁

②ご近所から最低5人は集まってもらう

— ご近所に在住の人に限り

③できればこちらが求める人材を

— ご近所の人間関係をよく知っている人。プライバシーにこだわらない人。
世話焼きさん。オープンな要援護者。福祉問題がよく見える人。

④住民の少数精鋭とケア会議というやり方も

— 多人数が集まると、周りの人の目が気になり情報を出しにくくなる

⑤「プライバシー」問題では毅然とした姿勢で

— 「その人を助けるか、プライバシーを尊重するか」の選択

特に①と②は絶対条件だ。②ご近所外の人で、そのご近所のことよく知っている人もいることはいるが、「知っている」というのは、要援護者の所在であって、その要援護者にだれが関わっているかは近くの人でないとわからないのだ。

④については、たくさんの住民に集まってもらったのはいいが、周囲の人の目が気になり、認知症の人などについて全員が口をつぐんでしまうということが起きる。こういう場合、マップ作りで見えてきたそのご近所の世話焼きさん数名を呼び集めて、関係者と一緒に再度マップ作りをするといい。それならどんな情報も出してくれる。マップ作りの場は秘密会の性格を持っている。ケア会議の場でもある。そこに住民がだれでも自由に参加してもいい、とはいかない。だから、そういう重要な

情報が出しにくい状況になったら、今述べたやり方に切り替えるのも一つの方法だ。

そして⑤。本研究所発行の「支え合いマップ入門」にはこの問題について、以下のように述べている。

- ◆マップづくりは基本的に、ご近所の人が集まって、ご近所内の福祉問題を出し合い、対策を考えることです。そのためには誰がどのように要援護になっていて、それに誰が関わっているのかなどを話し合わねばなりません。
- ◆「自分のことは話題にしないで、放っておいて」と主張する人もいますが、それでもその人に何かあった時は、結局は皆で助けなければならないわけでしょう。その人とよく話し合う必要があります。
- ◆といっても、話題に上るのは、ご近所の井戸端会議で出ている情報だけです。行政からの情報は要りません。民生委員や自治会長も、行政からもらった情報はマップづくりの場に持ち出さないことです。これは調査ではありません。
- ◆一見「井戸端会議」ですが、実質は住民レベルのケア会議という生真面目な営みなのです。
- ◆出来上がったマップとその情報は、あくまでご近所で助け合いを進めるためのものです。従って、それはご近所内に閉じ込めましょう。ご近所外には出さないということです。
- ◆本当に助け合いをするには、ご近所内のあらゆる福祉情報（要援護者等の）がオープンにならねばならないのです。「プライバシー」や「個人情報保護」などと言っていては助け合いはできません。助け合いをしたいのか、それともプライバシーを守りたいのか、二者択一になります。

実際にマップ作りの場ではどんなことが生じているか。

- クレームを出す人が出たら、「とにかくマップづくりをやってみましょう。終わった後で議論に応じますから」と言うと、最終的には何も言わずに帰っていく。
- 前掲の囲みの中で触れた通り、「助け合いをしたいのか、それともプライバシーを守りたいのか」の二者択一になる。これはじつは「二者択一」になりえない。人は助けなければならないからだ。だから、クレームが出て来てもそれを情熱で押し

返す「強さ」が必要だ。現に、「町民を絶対に助けるのだ」という情熱を持った自治会長は、そんなクレームは難なく蹴散らしている。人助けという営みは、やさしさだけではできず、それなりの強引さも必要なのだ。

■マップ作りの場で、ある高年男性がこんな発言をした。「俺の足元に鬱の人がいる。しかし俺はそのことを周りの誰にも言わない。『言わない』ことが、俺のその人に対する福祉活動だと思うよ」。私はその男性にこう問いかけてみた。「もしその鬱の人が、鬱が原因で何か困ったことが生じたら、誰が助けるのですか?」。その人が鬱であることをだれも知らないのだから、助けようがないのだ。すると彼は目をじっとつぶったままで、結局は何も答えなかった。「プライバシーを尊重しようという人は、人を助ける気はない」。極論に見えるが、そう理解してほぼ間違いないと思う。プライバシー尊重と助け合いは「対決概念」と言っている。

■関係者の中にも、マップの場で住民の問題を話し合うことに、後ろめたさを感じる人もいる。民生委員から、よくそんな悩みを聞かされる。社協の職員でさえ、「自分のことがマップの場で話題にされるのは気持ちが悪い」という人がいる。

福祉とは、当人は知られたくないし、言いたくないことをほじくり出し、社会にさらけ出して、時には当人の意思に反して、強引に助けの手を伸ばしてしまうことでもある。自分のことがマップの場であれこれ話し合われるというのは、確かに気分がいいとは言えないに決まっている。しかしそれをやらねば救えない。福祉は、きれいごとではないのだ。そして、その救いの実践者であり推進者が福祉関係者なのである。関係者本人が「気持ちが悪い」と言ってしまったら、おしまいだ。

■マップづくりは、ご近所の人たちの普段の私的な営みを把握する作業である。だから、ご近所さんに聴取する場合、いかにも公的な営みのようにするのはうまくない。私的な営みの把握には、聴取のやり方も私的なやり方を取る必要がある。ベストのやり方は、ご近所さんたちで井戸端会議を開く中でマップができてしまうということだろう。自治会役員や民生委員、社会福祉協議会のスタッフなどは、その後方支援、協力者役でいい。そこまで引くのだ。

ご近所の人たちが井戸端会議を開き、その成果を住宅地図に乗せることが、「個人情報」の問題になるのか。マップ作り自体が私的な営みなのだから、井戸端会議の中身を誰かに公表する必要はない。「会議」をひらいた人たちの胸の中に収め、その後の福祉活動に活かせばいいのだ。

マップを作ること自体を自治会長に報告、ないしはお伺いを立てる必要も、本来はないのだ。「自治会長さん。今日はだれとだれで井戸端会議を開きますが」などと言う人はいないのと同じである。だが現実には、マップを作ろうとしても自治会長の理解を得られずに断念しているケースがあまりに多い。だからマップづくりを公的な営みから引き離して、ご近所での私的な井戸端会議という営みにしてしまうという手もあるのだ。現に民生委員は、自分の担当地区内で住民と一緒にマップづくりをしている。自分の活動のヒントにするのだから、誰からも文句を言われる理由はない。それと同列にあると考えたらどうか。

■「ここだけの話ですが」バウムクーヘン型プライバシー論

ここからは少し話が横道にそれるが、プライバシーというものにも、いくつかの層があるということを考えてみよう。

「ここだけの話ですがね」－内緒話をする時の枕詞である。「ここだけ」に限って話します、それより外の人たちには聞かせない、ということだろう。

「ここだけ」の「ここ」にはいろいろな範囲がある。その会場に集まった人たちとか、家族や親族だけとか、クラスの中だけとか、班内、町内など、いろいろある。その場合、そこで話される話は、その中の人たちだけのプライバシーということが出来る。大抵の場合のプライバシーとは、家族だけしか知らないことで、よその人には聞かせない、知らせない、知られては困る、という話である。

■班ごとマップはなぜうまくいっている？

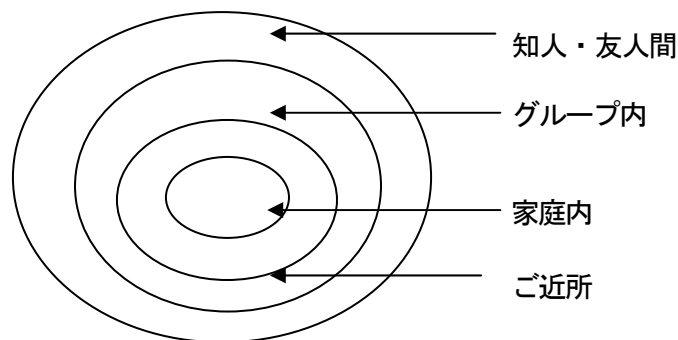
しかしプライバシーはそれだけではない。その組（班）だけのプライバシーというものもある。組の人たちには知られても仕方がない、防ぎようがない、しかも知っておいてもらわないことには、いざという時に困る。しかし組の外の人には知られたくない。知られても、助けてくれるわけではない。

そこで私たちは「班ごとマップ」というのを提案している。町内単位でマップを作ると、自分のプライバシーが侵される心配があるということで、なかなかマップづくりができない。だからそれはあきらめる。その代り、班ごとにマップを作るのなら構うまい。知られては困るという人もいるが、この範囲では既にプライバシーは知られてしまっているし、だからこそ、いざ困ったとき助けてもらえるのだ。

■二階幹事長の怒りに一理あるとすれば…

さて、話はまだ続く。どうやら、プライバシーというのは、バウムクーヘンのように層になっているのではないか。一番真ん中が家族・親族のプライバシー。次が向こう三軒両隣のプライバシー。お隣さんには、どうせ知られてしまっているし、まあ仕方がないかという範囲。その次がご近所。ちょっと範囲が曖昧になるが、家から数十軒の範囲。次が友人・知人の間のプライバシー。これはしょっちゅう使われている「俺たちだけしか知らないこと」で「他の人には言わない」という暗黙のルールがある。それからグループ内のプライバシー。今回起きたのがこのレベルのプライバシーの問題だ。

東日本大震災を巡る失言で、今村雅弘氏が復興相を辞任した。この件で、彼の親分の二階幹事長が「政治家が何か話したらマスコミが余すところなく記録を取って、一行でも悪い所があったらす



ぐ首を取れとはなんちゅうことか」と述べたという（読売新聞）。そして彼はこう付け加えた。「そんな人は初めから排除して（会場に）入れないようにしなきゃダメだ」。

人によっては、反省の色も見せない、部下をただかばうだけの二階氏に不可解さを感じた人もいるのではないか。

■「部外秘」の会合にすべきだったかも

彼にも言い分がある（と本人は思っている）。今村氏が語ったのは、グループ内の仲間に対してであって、それ以外の人たちに聞かせる意図はなかった。つまり二階氏の派閥内のプライバシーだった。そこで「ここだけの話」がゾロゾロと出てきた。その内緒話を外部の者たち（マスコミ）が、「聞いちゃった」とばかりに報道してしまった。ルール違反だと二階氏は憤慨しているのだ。

マスコミの言い分もあるだろう。公職にある者は、どの場であろうと、その発言には責任が伴うものだ。そんなバウムクーヘン型のプライバシー論なんか知ったことではない。

そう言われれば、ひとたまりもないが、凡人の私たちは、「ここだけの話」を喋りまくっている。特に家庭内では、お互いにかなりやばい話をしているのではないか。深く考えずに差別的な言葉を使うことさえあるだろう。

二階氏の言っていることを、彼の側から読み直してみたら、彼の言うとおりに、「部外秘」の会合にすべきだったかもしれない。部外者は入れない。そこでは派閥内の仲間だけに語っていい、やばい話も出てくるが、誰はばかることなく語れる。「派閥の仲間だけのプライバシー」という主張を、きちんと実行すべきだったかもしれない。

例えば首相番記者と本人との懇談会があるそうだが、ルール作りがしっかりできているからか、そこで出てきた首相のやばい発言は絶対に表沙汰にはなっていない。ルールが守られている。

4. 取り組み課題が出てくる聴取法

- ①その地域で「ありうる問題」をこちらからぶつける。
ーその中のいずれかに住民が反応する。
- ②「ありうる問題」の具体例をいくつか披露する。
ー住民にその問題のイメージが湧きにくい場合に。
- ③「ありうる問題」への対応策も具体的な実践例で紹介する。
ーこういう対応活動例がありますよ、とか。
- ④呼び水で住民から活動例が出たら、すかさず反応する。
ー住民の実践を生かした取り組みを提案する。

聴取によって問題と取り組み課題が出てくるために求められるのは、聴取者の徹底した主導性である。聴取者が「ありうる問題」をぶつけてみる。それをなるべく具体的な事例で紹介する。同時にその解決策も具体的な事例で示していく。

次から次へと具体例がぶつけられると、住民も反応せざるを得なくなり、思い当たる問題や具体的な事例を話し始める。

解決策も同様に、聴取者が「こんな解決行動がある」という事例を次々とぶつけていくことで、住民も「それなら、このご近所でもこんな活動が行われている」と話し始める。

そこまでできたら、あとはその住民の活動を最大限に生かした取り組み課題を考えればいい。住民は終始受け身だから、聴取の成否はこちら次第なのだ。

<第2章>

住民の関わり合いさがし

マップづくりで、福祉問題や解決方策を抽出するためにとりあえずやることは、住民の関わり合いの実態を線で結ぶ作業である。誰と誰が交流しているか、誰に誰が関わっているかなど。その線引きの中から問題や解決のヒントが見えてくる。

①住民の支え合いを第一義と考えること

—要援護者にはまず住民が関わるべきだと説く

②「あまりない」は「少しはある」ということ

—そのかすかな関わりを徹底的に追及していこう

③引きこもりの人も、2、3人との関わりはあるはず

—どんなに引きこもりでも、誰かには門戸を開けているものだ

④身内と思って真剣に考えてもらう

—要援護者の問題を他人事と考えていては、大事な情報は引き出せない

⑤線が引けなかったら、再度隣人に聴取

—住民同士の関わり合いはごく近くの人しか見えない

■「見守りネットは既にできている」？

そのご近所に既に見守りネットワークができているケースがある。あるご近所でのマップ作りで、一人暮らし高齢者の一人ひとりについて見守りの状況を聞き始め

たら、ここでは既にネットワークができていると民生委員が言い出した。そして、「ここからここまでは私が見ている」と、〇〇活動員と称する女性が。また「ここからここまでは私が」と、別の活動員も。そして何かあれば、民生委員に伝える。民生委員はそれを関係機関に伝える。だからこの地区では個々の見守りについて検討する必要はないというのである。

このやり方に問題があるとすれば、その活動員でない隣人たちは、足元の人のお安否を確認することさえしなくなるという点だ。日本人は特にそういう性向が強い。きちんとしたお役目の人が入れば、部外者の私は入るべきではないと。

もう一つは、要援護者の気になることは、その人のすぐ近くにいる人にしか見えないということである。要援護者の隣人なら、相手の異常にすぐ気づくはずだ。この利点を無にしてしまったのではないかと気がかりである。

さらにもう一つ、気になることを言うならば、相手の微妙な異変に気が付くのは、誰でもできることではなく、独特のセンス（能力）が求められるということで、〇〇活動員たちがそのセンスを持っているかどうかにも気になる。マップを作ると、そのご近所でそういうセンスの持ち主がだれであるが見えてくる。実際に関わりの線を引いていくことで、その人材が見えてくるはずだ。マップ作りはまさにそのためのものなのである。

■どれだけ引けたかー福祉の線

支え合いマップづくりでまず重要なのは、住民のふれあいや助け合いの営みを、線で結んでいくことである。AさんとBさんが日常的に交流しているのであれば、相互交流を意味する往復の線で2人を結ぶ。Cさん宅にDさんとEさんとFさんがしょっちゅう集まって井戸端会議を開いているとか、一人暮らしのGさんに隣のHさんがよくおすそわけをしている、といった情報も、線を引きながらのせていく。

■たくさん線が引ければいいのか？

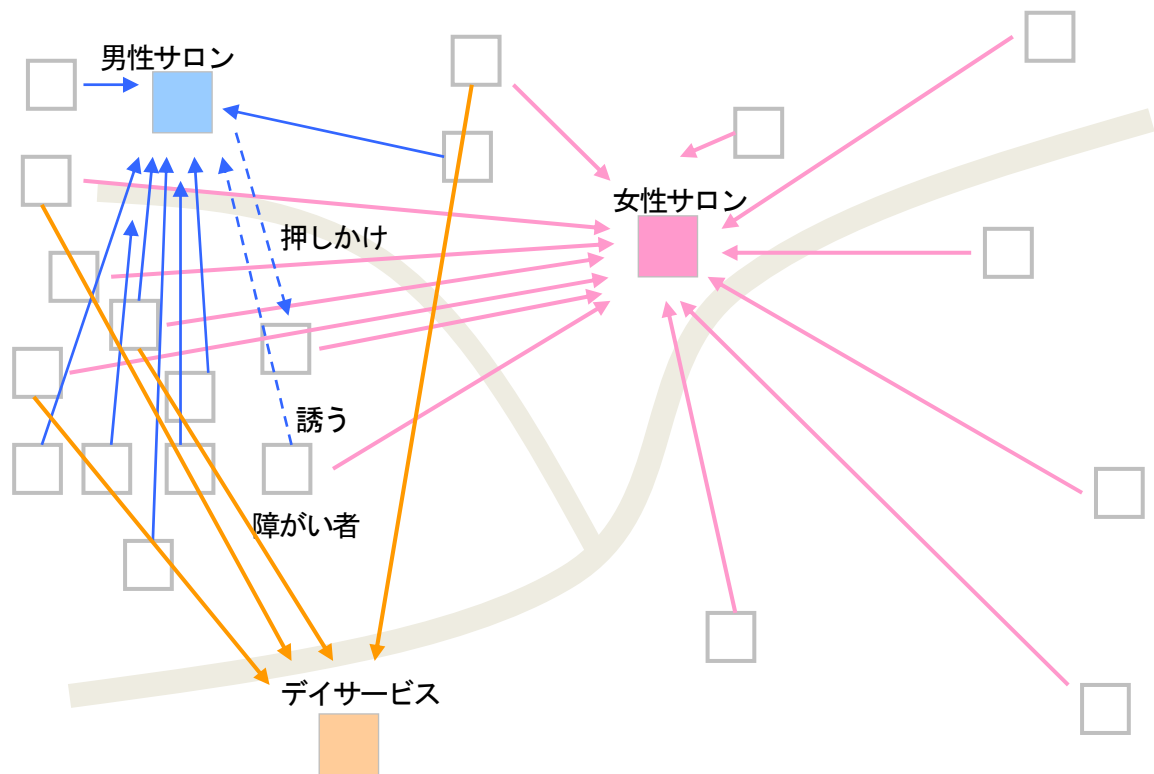
それはいいのだが、実際にそういう関係の線を引いてもらおうと、それこそ、むやみやたらに線が引かれていって、マップは線だらけとなる場合もある。ではそれだけたくさん線が引けたのだから、さぞかし助け合い盛んなご近所なのだろうと想

像するが、どうもそういう感じではない。何かが足りない。

■公民館に向けてたくさんの線が引けても…

初心者が作ったマップを見て、一体どういう線を引いているのかを点検すると、最も多いのが「ふれあいサロン」に参加する、あるいはカラオケの会に参加する、ラジオ体操に参加する、趣味の会に参加するといったものだ。そういう集まりは、大抵はご近所の近くの公民館や公会堂で開かれているから、その公会堂へ向けて、ご近所内の多くの家からそこへ向かって線が引ける。

ではそれらの線が、福祉的に見てどういう意味があるのかと考えると、率直に言って、それほど評価すべきものとは言えない。



■では、「意味のある線」とは？

福祉関係者の一般的な傾向として、「ふれあい」というものに高い価値を置いている。だからふれあいサロンや居場所づくり、世代交流のようなふれあいイベントに力を入れていて、それがうまくいくと、福祉がうまくできたという評価がされる。だがこれが、正確には「ふれあい」がうまくいったのであって、福祉がうまくいっ

たとは必ずしも言えないのである。

先日、宮崎県小林市で住民と一緒に作ったのが、ここに紹介しているマップである。ここではどういう「関わり合いの線」が引けただろうか。この中で意味のある線はどれだろうか。

■男女別々にふれあいサロン

マップの中の2つの場に線が集中している。真ん中が女性を中心としたふれあいサロン。左上では、この男性宅に男性が集まっている。カラオケのセットもあるが、中心は飲み会ということらしい。ある男性宅の離れを使ってやっている。女性と男性が別々に開いているのも面白い。

この中の男性のサロンは、福祉的に言っても意味がある。男性の場合、こういう飲み会の場さえできていないご近所が多いのだから、立派なものである。主催者は、いかにも世話焼きさんという感じである。男性の世話焼きさんは珍しい。

■サロンに参加させてもいい人がいる

ところで、この男性向けのサロンに、もっと来ていい男性はいないのかと調べると、2人いた。

①要介護の男性宅へ「押しかけサロン」はいかが？

1人は要介護の男性。主催者の男性も含めて、彼をサロンに誘おうという考えは持っていなかった。この人を誘うことはできまいかと聞いたら、「体力的にちょっと無理かな」という。ならば、その家に「押しかけサロン」を開きにいったらどうかと言ったら「それは無理」という言い方はしなかった。大体こういう引っ込み思案の男性も、押しかけられれば受け入れるということがわかっている。相当偏屈と言われる男性も、なぜか押し掛けた人は受け入れる。そんな話をしたら、みんな「いや」とは言わなかった。ここでサロンから彼の家へ向かって線が一本引ける。これが「福祉の線」だ。

②身障者をサロンへ誘ってみたら？

もう1人は、身体障害者の男性。彼については、「誘えば来るかもしれない」という話が出た。「いや」ではないということらしい。これが第二の「福祉の線」だ。

問題はだれがどのようにして運んであげるかだが、そんなに遠い距離でもないのだから、難しくはないだろう。

③農業を引退したばかりの人に異変が多い

前述の要介護の男性について、農業を引退してから気力がなくなったという話が出た。「それならこの人もそう」と名前があがった男性は、やはり農業を引退してから異変が見られ、認知症の疑いが出始めているという。「農業を引退した時が危険」という、重要な問題が出てきた。

認知症の疑いが出てきた男性は、両方のサロンに参加している。両方のサロンで見守られているのだから、この2本の線も福祉的な意味があるわけだ。

④デイ利用者も全員受け入れるサロン

女性のサロンで意味があると思われるのは、このご近所でデイサービスを利用している人はすべてこの女性サロンに受け入れられていた点だ。こういうサロンは、私が全国でマップづくりをしていて、初めて発見した。そういう話をしても、女性たちは別段珍しいことをしているわけではないといった顔をしていた。

このサロンの特徴は、体操、歌、踊り、旅行など、様々なお楽しみをしている点だろう。そこに要支援の人も受け入れているのだから、これ自体、介護予防効果が見込める。立派な福祉である。サロンの日には誰かが相乗りをさせてあげているらしい。送迎もやっていたのだ。

＜第3章＞

問題さがし

1.問題さがしの基本的な心構え

聴取を終えて、「問題は見つからなかった」などと言ってはならない。問題がないはずはなく、何としてもそれを見つけるのだという強い姿勢が必要だ。

①「問題」さがしのために、聴取をリードする

－聴取は始めから終わりまで「問題さがし」に徹底を

②問題を予測して質問をぶつける

－「地域ではよくこんな問題がある」－引き出しを持っていること

③本人は何が問題だと思っているのか

－本人の困り事は何か。どうしたいのか、願いは何か

④福祉の理想を始終意識する

－福祉のめざすものを見失ったら、聴くことがなくなる

⑤ご近所の本質的な問題は？

－個々の要援護者のことだけでなく、地域としての問題も

■聴取は「あら探し」なのだ

聴取の役割は、そのご近所が抱えている問題を探し出すことである。としたら、この役割をきちんと果たすためには、なんとしても、どんな方法を取ってでも、問

題を浮き彫りにしなければならない。一見問題がなさそうでも、それでも徹底して問題を探そうとする。これがマップ作りの基本的な心構えなのだ。最初から最後の一秒まで、とにかく問題を探し出すこと。聴取は、ただ住民の話を聞くのではなく、その隙間に隠れている問題を探す、「あら探し」のようなものだと考える。

■「この地区には問題がない」、と思いたい？

マップ作りに際して私は、その目的は取り組み課題を見つけることだと、必ず言うことにしている。ところが、マップ作りをしているうちに、住民は「この地区には問題がない」のだと思いたいし、だから問題があっても、それを胸の中にしまっ
てしまうということに気が付いた。

つまり問題を探そうという気がもともとないのだ。参加者は、この地区はいい所だということを再確認したいのである。だから、今日はマップ作りで特別、気にかかる問題は出てこなかったとわかると、安堵する。それに負けてしまっ
ては、問題は何も出てこない。

■マップ作りの場で福祉を考えることに気乗り薄？

また、変な話だが、マップ作りの場は必ずしも福祉を考える場にはなっていないということにも気づいた。参加者は、「今日は福祉を語る場だ」とは強く言われていないので、そんな意識はないままにマップに向かう。住民が集まる場合、常にそうである。だから福祉の問題が出てきそうな場合も、なるべくそれは避けていくのが普通だ。

サロンの話になると、ただ誰が参加しているといったことは言うが、要援護者をサロンに誘おう、一人暮らし高齢者も誘おうといったことは、あまり話に出てこない。こちらは話をそちらに誘導しようとするが、いまいち関心がそちらに向かわない。一人暮らしの人や老々世帯の人がサロンに来ていないか、確認しても、参加者はあまり関心がない。

「ただのサロンは公民館で言えば生涯学習、文化活動です。そのサロンに要援護者

を仲間入りさせると福祉活動になるのです」と私は言うことにしている。ただの文化活動でなく、またはただのふれあい活動でなく、それが福祉の営みになるには、どういう要件が具備されなければならないのか、どういう活動を加えたらいいのかについて、予め住民にレクチャーしておいた方がいいのかもしれない。

「デイサービス利用者もサロンに」という考え方を理解してもらうには、もう少し突っ込んだ説明が必要だ。一般住民の井戸端会議では、そんなことは非常識となっているはずだ。もう体が弱ったのだから、デイを利用すればいいというのが住民の常識なのだ。「いや、要介護になってもサロンに参加できるようにすべきなのだ」ということ、これをどうやって住民に納得させたらいいのか、意外に難しい課題である。

やはりマップ作りをする前に（できれば直前に）、助け合いの大切さやそのやり方、福祉の基本精神などについて、一定の理解をしてもらうための教育活動が必要だ。

■「ここは何も問題がない」？

ある市の社会福祉協議会から支え合いマップづくりを頼まれたが、どうしてこの地区のマップを作る必要があるのか、気になっていた。一度社協でマップを作ったが、特別問題が見つからなかったようだ。

マップづくりには約50世帯のご近所の世話焼きさんたちが数名参加してくれた。その中に飛び切り優秀な人も混じっていた。その人が中心になって、「気になる人」を探し、誰が関わっているかといったことを聴取し始めた。

そこで見えてきたのは、たしかに問題がない地区だということだ。一人暮らしの人もいることはいるが、それも数名で、しかも50代の人ばかりで、「この人たちはまだ元気で働いているよ」という。老々世帯は若干多いが、その中には例えば老々介護といったケースはほとんどない。世話焼きさんは言った。「ここは問題がないんですよ」。

■デイ利用者と施設入所者が合計16人も

しかし、それにしても「気になる人」がいなさすぎる。別にたくさんいる必要は

ないのだが、なんとなく異様ではある。

そこで、介護保険サービスを受けている人はどれぐらいいるのか、聞いてみることにした。

まずはデイサービス利用者。ご覧の通り、6名いる。次いで老人ホームに入所した人。マップの外に「入所」と書いたところへ向かって線を引き始めたら、結局10名もいた。わずか50世帯のこのご近所の中の、16名がデイサービスを利用し、施設に入所していた。

何のことはない、「気になる人」はすべてこちらの施設へ行ってしまっていたのだ。残された人に「気になる人」はほとんどいないのも当たり前であった。

地元の人たちは、この16名は自分たちの関わりの対象から外れた人だと考えていた。「このご近所は何も問題がないんですよ」と言ったのは、そういう意味だったのだ。

■16名でサロン参加者はたったの1人

本当にそうなのか。では「問題の人」がいないこの地区で、世話焼きさんたち活動家は何をしているのか。今流行のふれあいサロンを開いていた。参加者はマップにある通りで、かなりの方が参加しているから、盛況と言ってもいい。

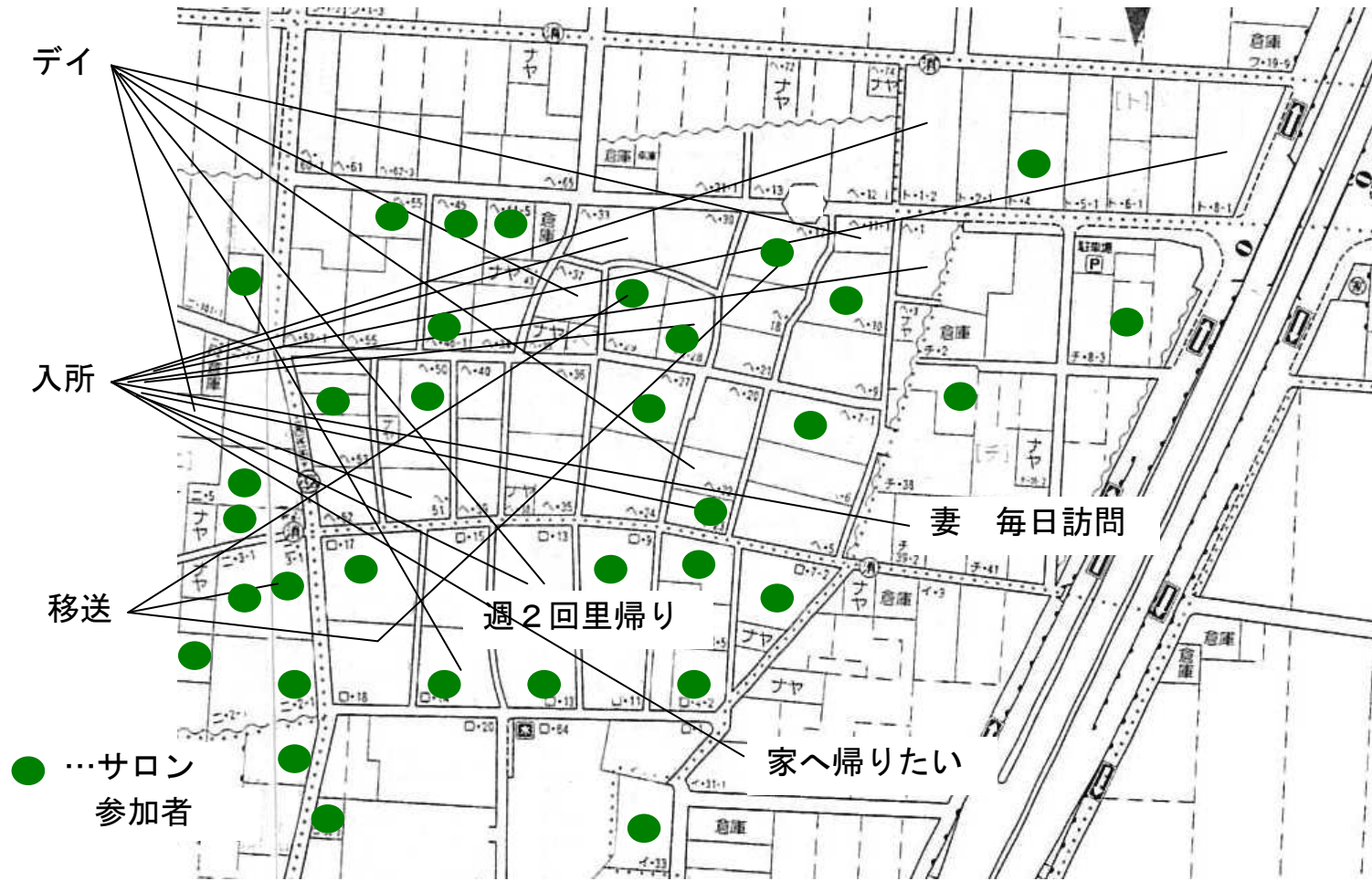
ここから「クロス集計」を試みてみた。サロン参加者と、施設入所者やデイサービス利用者が重なっているケースは何人か。2人いたが、その中の1人は、サロンに参加しているのは子どもで、親は入所していて、サロンに参加しているわけではなかった。結局、サロンに参加していたのはたったの1人。この人は要支援だが、かなり積極的にふれあいを求めていく人で、その元気でサロンにも来ていた。

デイ利用者をサロンの仲間に加えること、これがサロンを開いている人たちの大事な「活動」ではないのか？

もっと言えば、施設に入所していても、サロンに里帰りさせることだってできる。それもまた課題になる。

■週2回里帰りしている人も

施設入所者10人の中で里帰りをしている人を探したら、1人いた。それも、週に2回里帰りをしているというから、ずいぶん熱心な家族である。



ではこの人が里帰りした時、地元の人が受け皿になってくれているかと言えば、そうではなかった。せめて里帰りした時に皆で訪問してあげればいいのだが。

聞くとところによると、施設はここからそう遠くない。一番遠い施設でも3キロ程度というから、施設を訪問することも、また里帰りをすることもそう難しくない。要するにこの人たちは自宅の「離れ」に住んでいると考えればいいのだ。だから週に2回も里帰りをさせる家族もあるわけだ。

こういう場合に、誰かが送迎サービスをしてあげるといい。ちなみに送迎サービスをする用意のある人はいないかとマップ上で探したら、3人見つかった。既に(施設入所者にはではないが)実践している人もいる。もっと志望者を募れば出てくるのではないか。

そんな話をしていたら、「この人は家に帰りたがっている」という人も見つかった。何とかしてあげなければ…逆に、入所した夫を、毎日訪問しているという妻も見つけた。

■ 16名は全部老人クラブの会員だった。ならば…

世話焼きさんに聞くと、ここは老人クラブの活動が盛んであるらしい。ほとんどの人が入会している。つまり高齢になれば加入することになっているということだ。では、施設に入所した人はどうかと聞くと、やはり、形だけだが入会しているという。ならばクラブの例会やイベントにも参加させるべきである。送迎班を編成して、責任をもって送迎をする。介助人も同時に組織化する。介護経験者がメンバーの中に、少なくとも7、8名はいるはずだから可能なはずだ。

■ 「住み慣れた家や地域でその人らしく」は無理なのか？

私はマップづくりの場で、同じようなことをしている。デイサービスの利用者と施設入所者を特定する線を引くと、デイ利用者と施設入所者がそれぞれ5本程度引ける。この地区は、デイは平均値としても、施設入所者が異常に多い。

その上で、この人たちにどんな関わりをしているかと問うと、住民は「？」と首をかしげる。「この人たちはもう施設に行ったり、利用したりしていて、地域にはいない人です」と言うのだ。

しかし「いない」とはどういうことか。彼らも施設で生きている。デイ利用者は夕方には帰宅するし、週のうち大部分は地域にいるのだ。

だから、物理的にいないというよりは、彼らの意識の中で既に不在になってしまっているということなのだ。そこで私は厚労省の言っていることを参加者に伝える。国がめざしていることは、「どんなに重い要介護になっても、住み慣れた家や地域でその人らしく生きていけるように支援すること」なのだと。少なくとも本人はまだ地域で生きている気持でいる。段々とあきらめていくのだろうか。

■地域ではますます「棲み分け」が進行

そこで、ここで述べたように、まだ地域と繋がっていたいという本人の願いに沿って、対応していかねばならないということだ。

課題は既に述べた通りで、①施設訪問、②里帰りの受け入れ、③サロン等への受け入れ、④老人クラブの活動への参加受け入れ、⑤そのための移送サービスや、⑥介助人の配置、⑦できることなら自宅復帰。

しかし現実はずますます暗くなっている。介護保険制度が始まって以来、地域での「棲み分け」が進行する一方である。要介護になったら介護保険制度を利用すればいい。そして施設に入所したり、サービスを利用すればいい。この流れを押しとどめようとする勢力が不在なのが最も気になるところだ。

2. 「気になる人」さがし

「気になる人」とは、福祉課題を抱えた人のこと。ではその人はどういう課題を抱えているのか。以下の4項目を確認すること。

①安全は守られているか？

- ー見守りはきちんとなされているか。危機対応は十分か。
- 日々見守る体制はできているか。何かあった時の連絡体制は？

②困り事はないか？

- ー本人が抱えた困り事を突き止めているか。
- 本人が意識していない、隠れた困り事もある。

③介護や介助はきちんと行われているか？

- ープロの関与は十分か。住民による介護サポートは？
- 家族の支援までなされているか。

④「その人らしく」生きているか？

- ー本人がこだわっているものに関わっているか。
- 豊かさダイアグラムは満開か？

■気になる人とは、「迷惑な人」だった！

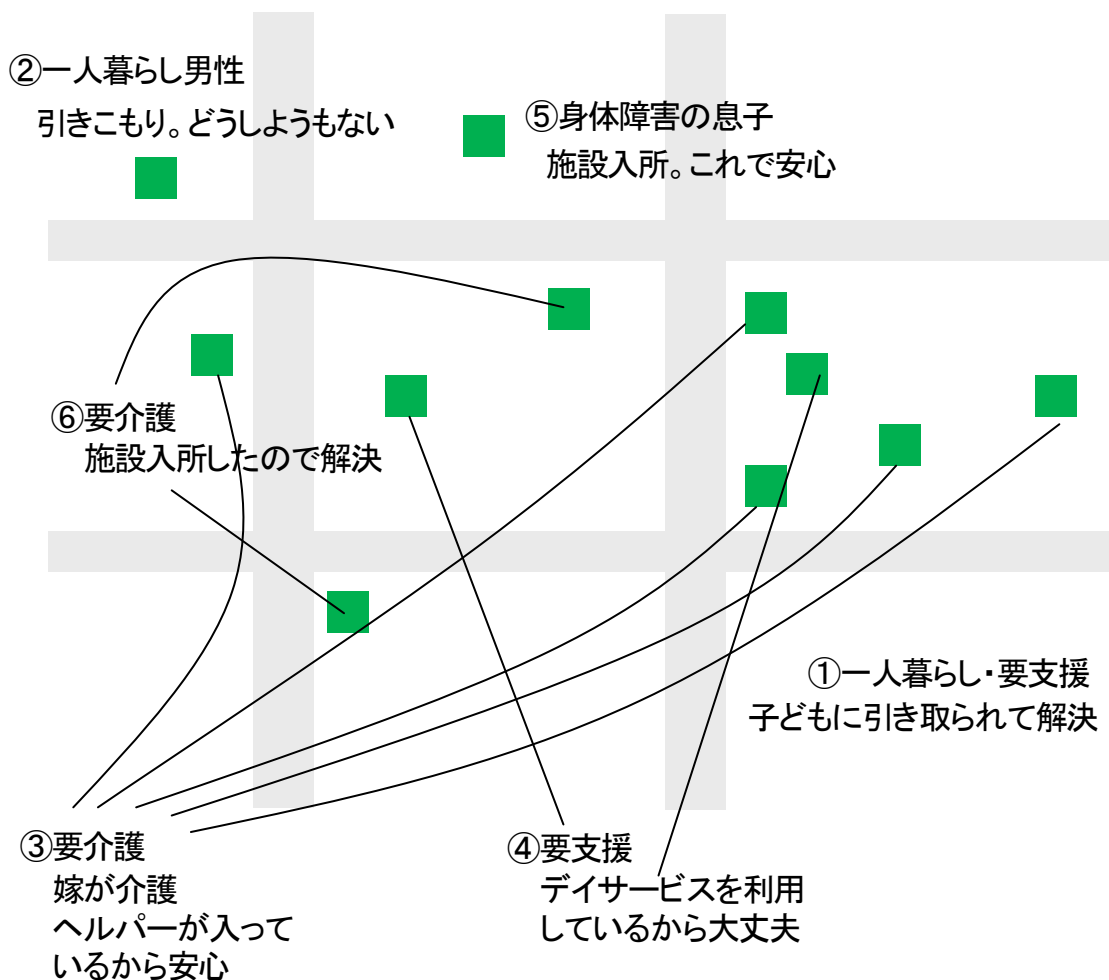
住民にとって「気になる人」とは誰のことだと思われるか。意外なことがわかった。私たち関係者にとって気になる人とは、一人暮らし高齢者とか要介護者、要するに援護を必要としている人のことだろう。

ところが住民はそうは考えていなかった。住民にとって「気になる人」とは、彼らにとって迷惑な存在である人のことだったのだ。暴言を吐く、ラジオを大音響で流す、ゴミ屋敷や猫屋敷。「今のところ私たちに迷惑をかける人はいません」と民生委員が締めくくった時、私は啞然としたものである。

■「気になる人」はいない？

下のマップは、「マップを作ってみて、特に気になる人は見つからなかった」という場合の、マップの一例だ。こういう考え方でマップを作っているのは、何度マップを作っても、気になる人は出てこないのではないか。

読者も考えてみていただきたい。①から⑥までの各項目について、本当に気にならないのか。



■卒業させない

■超高齢になれば地域活動は卒業？

先日、福岡県の福津市で、社会福祉協議会のスタッフと一緒に支え合いマップづくりをしていて、おもしろいことに気づいた。3カ所のマップをスタッフが手分けして同時に作ったのだが、取り組み課題を整理していて、地域には一つの大きな問題があることがわかった。

今は超高齢社会と、よく言われる。老々介護の時代だとも。超高齢になれば足腰が弱くなる。耳も遠くなる。妻や夫を介護しなければならなくなる。デイサービスを利用するようになる。老人ホームに入所する人も。そうなると、今まで参加していたサロンや老人クラブなどは卒業だ。畑で野菜を作って、できたものをおすそ分けするといった活動もおしまい。

それが当たり前だと私たちは見てしまう。「卒業」を容認してしまえば、課題というものがなくなる。

■重い要介護でも地域で自分らしく生きられる

では福祉とはもともと何だったのか。厚労省は言っている。どんなに重い要介護でも、住み慣れた家や地域でその人らしく生きられるように応援しようと。ならば、そういう人たちを簡単に卒業させてしまったら、福祉は成り立たなくなる。なんとしても卒業させないのが福祉だったのだ。

などと言うと、マップづくりに参加した人たちから、「そんな無茶な」といった戸惑いが生まれる。そういう状態になったらそろそろ卒業させてもいいではないかと。だからマップづくりを主導する者は、しっかり踏ん張らなければならない。「人間は最後の最後まで人間らしく生き切ることが大切なのであって、それを応援するのが本当の福祉なのですよ」と。

＜福津市でのマップ作りで出てきた「卒業」させない問題＞

本人の事情	卒業の対象	卒業させない策
超高齢で耳が遠くなった。「通訳」がいたが、要介護になった	結果として、サロンへの足が遠のいた	新しい「通訳」を掘り起こそう
109歳になった	老人クラブから「卒業」した	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけクラブ」
膝の手術を控えている	女性サロンから引退。	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけサロン」
同上	畑で野菜づくりができなくなった	皆で畑に連れ出そう
デイサービスを利用し始めた	日程が重なり老人クラブに参加できなくなった	ケアマネと日程調整で参加可能にしよう
元大学教授。元自治会長で、デイサービスを利用し始めた	地域活動から完全に引退	他にも文化人が多数いるので、教養講座の講師になってもらおう
90代の男性。認知症の妻の介護に専念	サロンや老人クラブなど地域活動から引退	要介護の妻同伴の参加も勧めよう
老人ホームに入所	地域から完全に撤退	里帰りで自治会活動の参加を応援しよう。組費をまだ徴収していた
高齢で足腰が立たなくなった	カラオケサークルに行けなくなった	仲間が車で運んであげよう
長年引きこもっている		密かに犬の散歩をしていた。ならば犬を通したふれあいを広げよう

■住民に納得させる材料を見つける必要が

ただこうした主張をぶつけるのではなく、「なるほど、そういうことなら、やる価値はあるかも」と住民に納得させる材料を見つける必要がある。そのヒントはたし

かにあるのだ。

①耳が遠い人には通訳がついていた！

例えば、耳が遠くなったために、サロン等から足が遠のいたというケースはよくある。こうした悩みは他の人にはなかなか理解しにくい。だから放っておくうちに、いつの間にか来なくなる。それでも参加しているケースというのは、周辺に、この人の通訳をする仲間がいる場合である。

今回の場合も、やはりいた。ただしその通訳の人が要介護になってサロンに来なくなり、自然、耳が遠い本人も足が遠のいた。だから対策は、新しい通訳を見つけようということになる。そんなに難しいことではない。

②入所者からも組費を徴収していた

施設に入所した人を、自治会活動などにまた参加させようというのは、今の地域の事情からしたら考えられないことかもしれない。ところがこの地域の興味深い慣習が浮かび上がってきた。施設に入所した人からも組費を徴収していたのだ。

つまり「あなたはまだ自治会会員なのですよ」と本人に自覚させようとしているのだ。ならば当然、自治会のイベントには移送サービスをしてでも参加できるようにしなければならない。

③本人が来られないなら押しかければよい

超高齢になれば地域活動から離れるようになるのは当然だろうが、しかし方法はある。サロンには来られなくなったが、仲間が訪問して「押しかけサロン」をすれば、ちゃんと受け入れている。訪問型に切り替えればよいことなのだ。老人クラブも同様の対応ができるはずだ。

④体を使う活動はできなくても、体験を生かせばよい

長い間自治会長などで地域に貢献した人も、超高齢になればそれも難しくなる。しかしこれまでの実績を何かで生かせないものか。そういう人物で、しかも元大学教授だという人がいた。これだけの実績と能力を生かさない手はない。調べてみたら、そのご近所内にたくさんの人材がいることがわかった。ならばこの際、彼らに講師としてその知識と技術を生かしてもらえばよい。それなら超高齢でも、要介護でも可能だ。

⑤足腰が立たなくなったら車で移送すればよい

最も多いのが「足腰が立たなくなったから」であるが、ならば誰かが移送サービ

スをすればいい。本誌で北海道夕張市の移送サービスについて述べたことがある。公的な鉄道も民間輸送もほとんどが走らなくなった。住民は家に閉じ込められることになる。そんなときに住民は、まさに住民総出で移送サービスを始めた。誰もかれもが、移送の必要な人を運んでいる。つまり夕張市全体が要介護になったと思えばいい。その対策は、住民総「移送ボランティア」になることだった。

超高齢者が地域にたくさんいるようになれば、移送サービスはだれもがやるべきことになっていく。それが超高齢社会の地域のあり方なのだ。たった数名の超高齢者の移送ができないというのでは、福祉社会とはとても言えない。

表にある対象者の多くが「移送サービス」の必要な人ばかりではないか。これに対応する体制を作るのが、基本中の基本というべきである。

3. 「気になる対象」

一般的に「気になる対象」と言える人を頭に入れておいて、住民に確認していけば、ご近所が取り組むべき課題に早く気づくことができる。こういう人でこういう状況にある人、地域のこういう問題に気をつけてみたらどうかという事例を表にした。

(1)	一人暮らし高齢者	<ul style="list-style-type: none"> ① 男性（50～60代から） ② 超高齢男性 ③ 要介護（認知症） ④ 引きこもり ⑤ 女性 	孤立死の恐れ。食事は？ まだ運転をしているのか？ 生活の全般に関与 それでも接点はないか？ 買い物などの移動手段は？
(2)	高齢者のみの世帯	<ul style="list-style-type: none"> ① 老々介護（夫が介護） ② 今は元気だが… ③ 夫の引きこもり 	虐待。妻を隠していないか？ 今のうちに夫婦で地域デビューを 妻がグループへ連れ出そう
(3)	老親と息子	<ul style="list-style-type: none"> ① 息子が老親を介護 ② 息子が親の年金で生活 ③ 親が昼間一人暮らし 	虐待、ネグレクトの心配 親亡き後の生活・息子の自立 昼間の見守りは？
(4)	要介護	<ul style="list-style-type: none"> ① 家族が介護 ② 施設入所 ③ デイサービス ④ 認知症 	家族のストレス。介護者の連帯は？ 里帰りは？ 地域活動へ参加は？ サロンや趣味への仲間入りは？ 隠していないか。サロンに受け入れられているか？
(5)	「困った人」	<ul style="list-style-type: none"> ① ゴミ屋敷 ② 猫屋敷 ③ 騒音 	本人が見込んだ人を探せ
(6)	障害児者	<ul style="list-style-type: none"> ① 老親と障害者（親亡き後） ② 障害児 ③ 精神障害 	子どもの自立 潜在能力の開発 治療。ふれあい。仕事。趣味。

4. こう考えたら「問題」は見えてこない

テーマごとに、一般的にはその事態をどう見るかを並べてある。この見方だと取り組み課題は出てこない。

	対象者	一般的な見方	問題が出てこない理由
①	一人暮らし高齢者	まだ元気で、特別に問題はない	安全の確保だけを目指すのなら、問題は出てこない。「もっと豊かな生活」を目指せば、課題はいくらでもある
②	引きこもりの人	だれとも交流したがないし受入れないので、手の打ちようがない	問題はあるが、関わる手立てが見つからないという事例。本人は何かにこだわっていないか
③	一人暮らしの女性が息子に引き取られて行った	これで一安心	本人は行きたくなかったのではないか。当事者の側から見る事ができるかがカギ
④	在宅の要介護者	家族が介護しているし、ヘルパーも来ているので問題はない	家族介護に任せきりでいいのか。介護者の人生はどうなる？ それに要介護者も豊かな生活を求めている。
⑤	知的障害者	元気だし家族が面倒見ているから大丈夫。作業所に通っているから、ふれあいも問題ない。	親が見ているから今はいいが、親亡き後はどうするのか。それに当人の能力開発もしなければならぬ。
⑥	デイサービス利用者	特別に問題はない。	デイを利用すると地域のふれあいの輪からはずされる恐れも。そのため、ますますデイ頼りになる。
⑦	老人ホームに入所	これで家族も重荷から解放。	要介護でも住み慣れた家や地域で自分らしく生きたいという願いを叶えるのが本当の福祉だ。里帰りはしているか
⑧	高齢者のみの世帯	今のところ二人とも元気で、特別に問題はない。	いずれ老々介護になり、地域に支援を求めなければならなくなる。今から地域との交流をしておかねば。

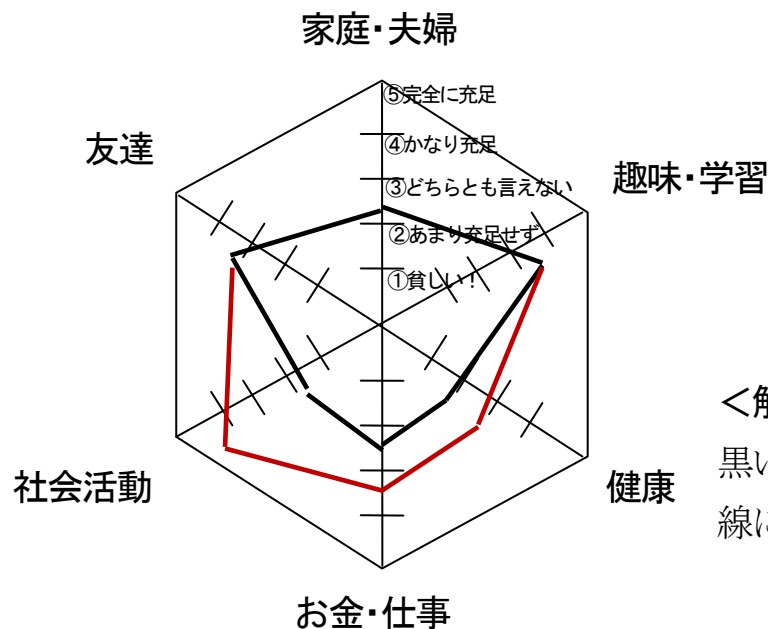
5.ダイアグラムでその人らしさを測定

気になる人や事に関して、安全が守られているか、困り事はないかというだけでなく、「その人らしい生活」ができていないかも点検する必要がある。それがどの程度できているかを測る物差しとして本研究所では豊かさダイアグラムを開発した。

<豊かさダイアグラムの測り方>

①自分らしくの充足度を測る「豊かさダイアグラム」とは？

項目はここにあるように6つ。①仕事・収入、②健康、③趣味・学習、④家族・夫婦、⑤友達・ふれあい、⑥社会活動。ボランティア。



<解説>認知症の女性
黒い線だったのが、赤い線に改善された。

②項目別に充足度を5段階で評価し、6つの点を結べば豊かさ満開度

認知症の80代の一人暮らしの女性。「趣味」は畑で野菜作り。収穫した野菜でおしんこを作っている。畑で隣り合った仲間（3人）とおしゃべり（「友達」）。妹がすぐ近くに住んでいて毎日様子を見に来る。娘も時々やって来る。

<ダイアグラムで豊かさ満開にする法>

①どうすれば充足度がアップするか。作戦を考える。

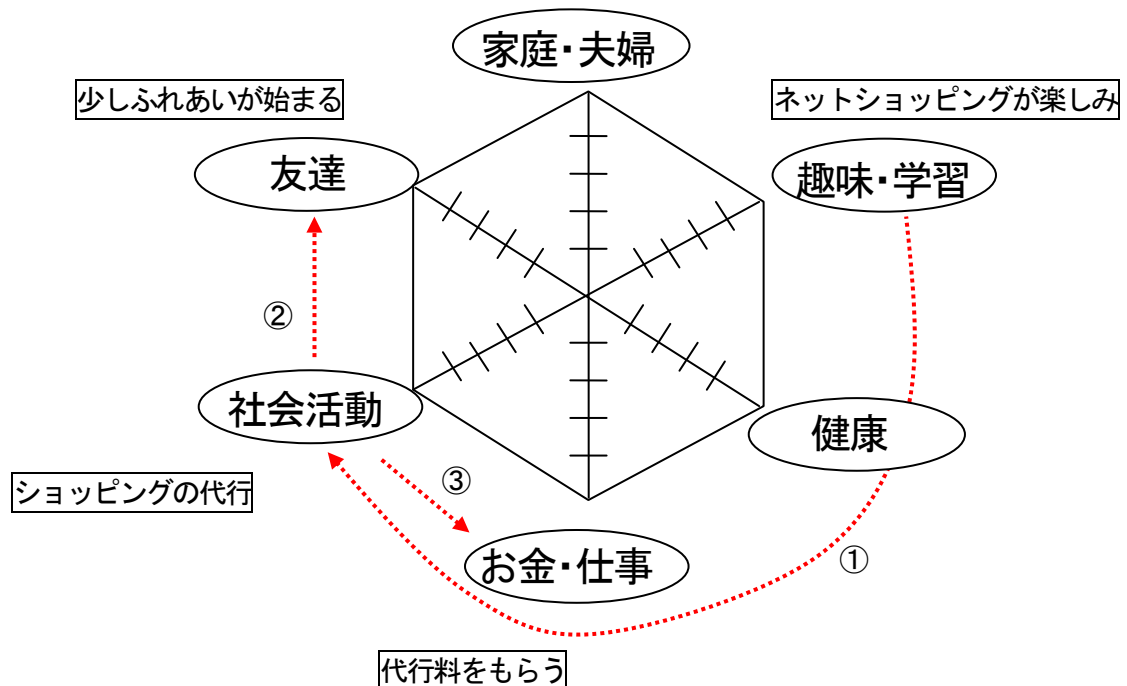
この女性の場合、収穫した野菜で仲間と料理作り。それなら火も使える。作ったおしんこを配れば「社会活動」。おしんこを市場で売ればお金にもなる。活動が活

発になれば「健康」も改善。「趣味」も充実。

②効率的な豊かさ満開策を考える。

この6つを個別に追究するのは大変だ。基点になるものがある、それを基に、ついでに他の項目も充足させてしまう方がやりやすい。

ある女性が職場でセクハラを受けて、家に引きこもっているという。家では何もしていないというが、職場でパソコンを使っていたのではないかと聞くと、確かに今もパソコンは使っていると。パソコンで何をしているのか。ネットショッピングをしているらしいと分かった。それなら彼女の家に押しかけて、「うちの買い物も頼むよ」とやってみたらどうか。拒否されてもかまわずに、「(店舗ページを)開いてくれ」。そして「それを買ってくれ!」。こうやって「ボランティア」をさせてしまう。他の人も押しかける。「ネットで安く買ってもらえる分、代行料を少し払おう」となる。ここまでくれば「ふれあい」も最低限は始まるし、収入も少しは見込める。自己実現の応援が結果として本人の課題の解決にもなる。



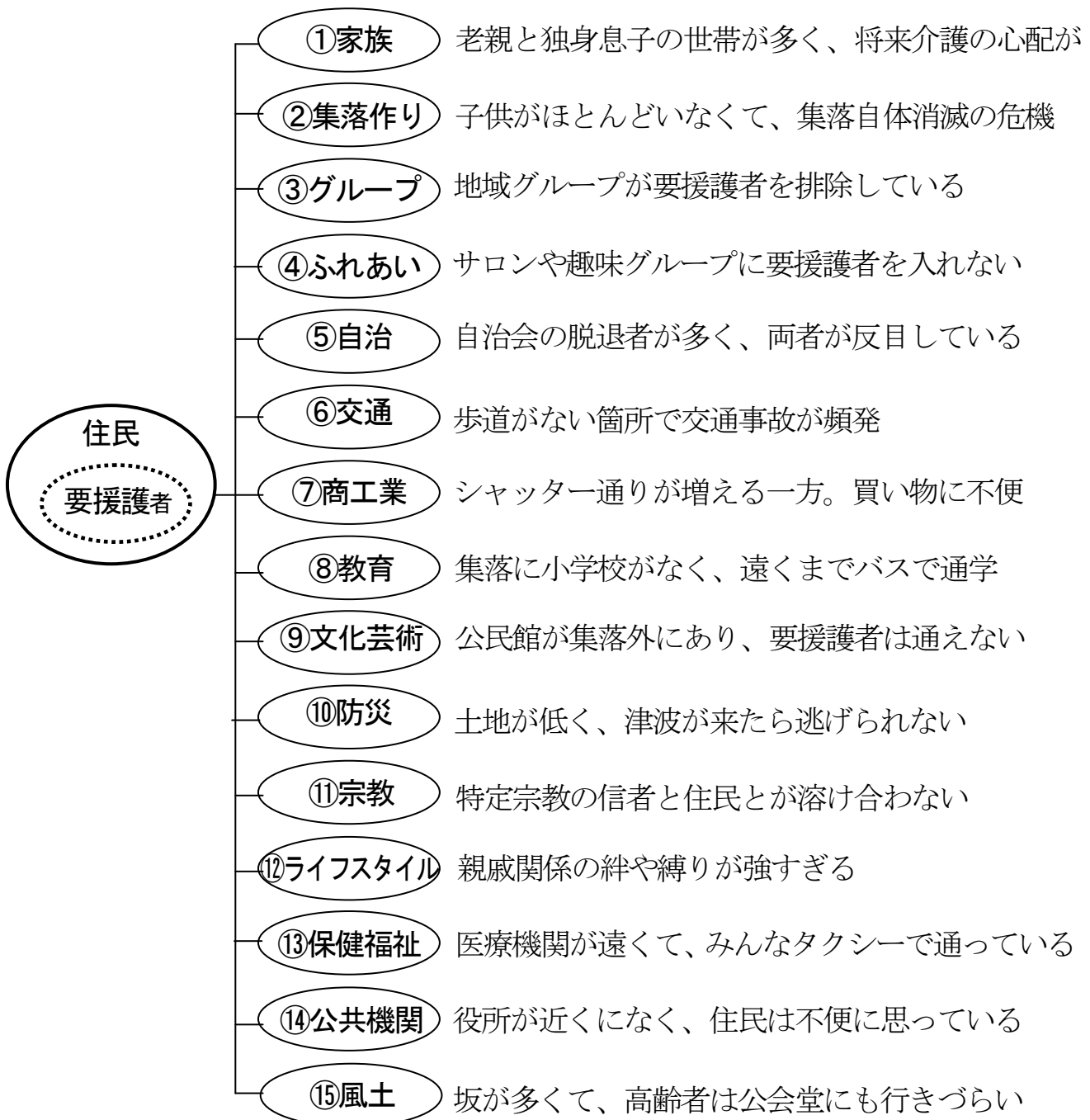
③①→②→③の流れが要援護者の場合によく使えるパターン。

要援護者は人に助けをもらう一方になりがち。「社会活動」が不充足になりやすい。そこで本人の趣味を生かして、人の役に立てるように仕掛ければ、「ふれあい」が生まれ、場合によっては「収入」が見込める。

6.地域の「気になること」

人間のよりよい生活を妨げているものが地域にはたくさんある。それが要援護者には増幅されて迫って来る場合も少なくない。店や医療機関がないと、一般住民も不便だが、一人暮らしの高齢者や要介護者になると、その不便さはもっと深刻だ。

地域では、人だけの問題はむしろ少なく、大抵は以下のような事柄と複雑に絡まり合っているとみていい。そのご近所ではこれらのどれが生活障害になっているか、それが人々や要援護者にどのように影響しているか。これが地域課題になる。



<第4章>

解決策さがし

1.これはまだ「解決」ではない

関係者に問題を提示し解決策を考えてもらおうと、以下のような案が出てくる。

①状況をよく把握する

－「把握」した上で、どんな解決策を考えるかが大切

②情報を共有する

－共有した上で、どんな解決策を考えるか

③当面、様子を見る

－まだ行動に移しているわけではない

④見守る

－ただ見ているだけでは、解決行動とは言えない

⑤相談に乗る

－相談に乗った上で、どんなアドバイスや支援策を講じるかが大切

⑥サロンに招待する

－サロンという環境に置いてあげただけ。そこからどんな変化が？

⑦関係機関やサービスにつなげる

－繋げれば一件落着とは言えない。当面の応急措置にすぎないかも

この6つは、まだ問題は解決されていない。この後どうするのが問題解決の本番なのだ。「状況を把握」した後どうするのか、「見守って」その後どうするのか、「相談に乗った」後どうしてあげるのか。サロンに行けば何でも解決するのか。

サービスにつなげれば、一件落着なのか。サービスというものを今の関係者も住民も過信している。施設入所にしても、ショートステイにしても、デイサービスにしても、これが果たして恒久措置なのか。本人の立場から真剣に考える必要がある。

2. 解決策さがしの基本的なあり方

解決策を考える段階になると、マップから離れて、既成のサービスや活動を適用しようとする。これでは何のためにマップを作るのかが分からなくなる。ここからがじつはマップづくりの正念場なのだ。

①本人はどうしたい、どうしている？ 周りの人はどうしている？

問題に対して当事者はどうしたいのか、実際にどのような解決行動をとっているのか。周りの人たちはどうしてあげたいのか、どういう行動をとっているのかなどを、マップ上で丁寧に聞いていく。

②解決につながりそうな人や行動を探す

当事者の問題への解決努力とは別に、その問題解決につながりそうな地域の資源を探してみるのもいい。

③解決策さがしはマップ作りの場で行う

解決のヒントも、マップ作りの場で見出せる。それを生かした解決策を住民にぶつけ、反応を見ながら、現実的な解決策を模索する。

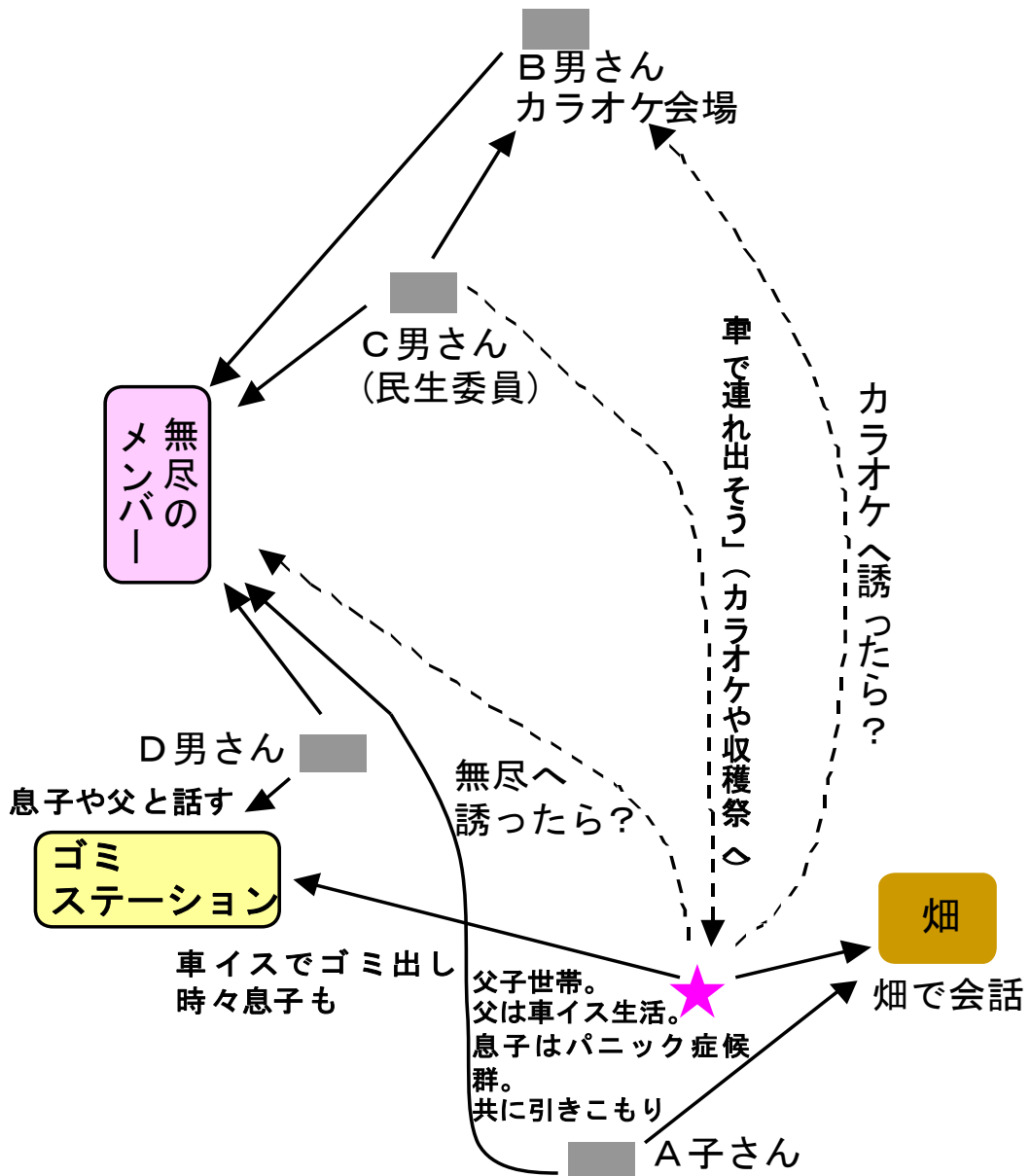
④解決策の引き出しをたくさん用意しておく

問題ごとにいくつかの解決策の案を用意しておいて、それをぶつけていけば、どれかは当たるものなのだ。

3.マップによる問題解決の枠組み

【気になる人】

父子共に引きこもり。父は車いす生活で、息子はパニック症候群なので、放置するわけにもいかない。初めは接触の手がかりが見つからなかったのだが、その後、意外な事実が見つかった。②が本人の行為、③が住民の関わり。これだけでは心もとないが、④にあるように接触できる可能性が、意外なほどたくさんあることが分かってきた。

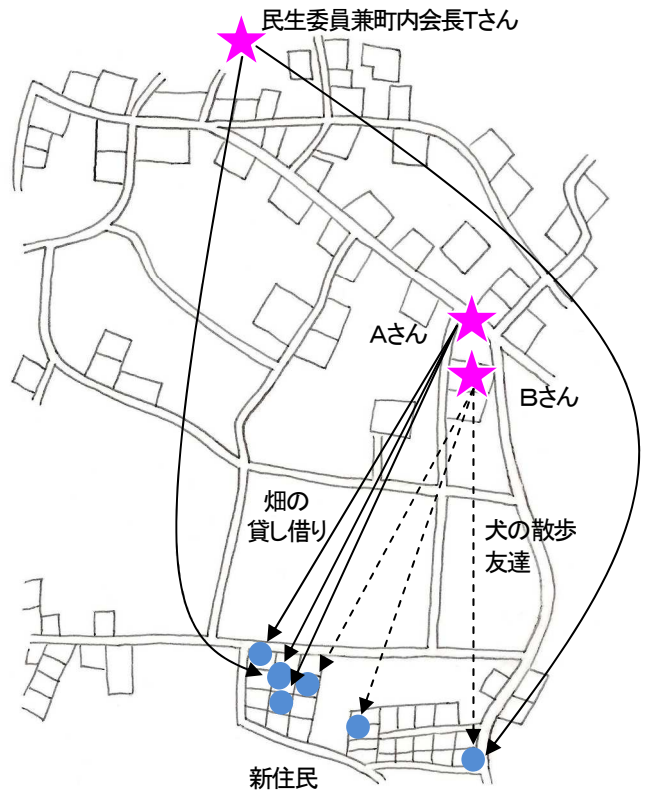


地域の気になる人	①生活状況・気になること	②本人（家族）の対策行動
<p>■父親と息子の2人世帯。</p> <p>■共に引きこもり。■息子はパニック症候群。</p>	<p>■父親は車椅子生活。</p> <p>■頑固で誰とも交流しようとしなない。</p> <p>■息子はコンビニの職も失い、家に引きこもっている。</p>	<p>■畑へ行く途中に坂があり、綱を張って登っている。</p> <p>■畑で隣り合わせたA子さんには話をする。おしんこを作ってプレゼントしてくれる。</p>

③住民の対策行動	④解決のヒントになる人・行動	⑤解決案
<p>■息子がゴミステーションに来た時にD男さんが声をかけている。</p> <p>■畑が隣り合わせのAさんも話しかけている。父親はA子さんには、自分の死後、息子が心配だと打ち明けている。</p>	<p>■以前はもっとオープンで、カラオケにも行っていたし、地区で開かれている無尽にも参加していた。</p> <p>■今もカラオケグループがあるし無尽も行われている。</p>	<p>■カラオケや無尽に誘う。</p> <p>■畑へ行く途中の坂をバリアフリーにしてあげる。</p> <p>■彼が作ったおしんこをごちそうになる。</p> <p>■息子の仕事をみんなで探してあげる。</p>

【気になること】

こちらは「地域の気になること」。農家主体の地域に新住民が移り住んできたが、両者が溶け合わず、町内会長は対策に苦慮していた。マップを作ってみると、初めは交流の手がかりが見つからなかったが、「個人的に交流しているのでは？」と質問を変えたら、犬の散歩友達や、畑の貸し借りで交流が行われていたことがわかった。会長も、新住民が子ども会には加入していることを思い出した。それらを生かして交流イベントをすれば…



地域の気になること	①気になる内容	②住民が取っている対策行動
<p>■旧住民と新住民の交流がない。</p>	<p>■農家中心の地域に公営アパートができ、若い住民が住み着いたが、両者の交流がない。彼等は自治会にも加入しないと自治会長が嘆いている。</p>	<p>■個々では交流していた。 ■Aさんは、アパートの3軒の人に畑を貸していた。 ■Bさん（一人暮らし女性）は、アパートの3軒と犬の散歩友だちになった。</p>

③解決のヒントになる人・行動	④解決案
<p>■前記のように個人的なつながりをもっと探ってみたら、参考になる事例が出てくるかもしれない。 ■交流がないと嘆いていた自治会長も、「私は子ども会の役員をやっているが、子ども会には彼等も加入していた」</p>	<p>■当面は①犬の散歩友だち、②畑の貸し借り、③自治会に子ども会の関係—これらのつながりを他の人についても調べた上で、これらを生かした交流イベントを企画したらどうか。</p>

4. 解決策を住民流で練り直す

住民流でどう解決すべきかを考え、その方向で練り直す必要がある。

① 本人の自助力を強化させているか

自助力とは、自身と家族で何とかせよというのではなく、逆に周囲の資源を巧みに活用する腕があるかということで、そういう資質を培っていかねばならない。

② 同じ問題を抱える人同士の助け合いを仕掛けているか

一人暮らし女性が数軒集まっていると、必ずと言っていいほど助け合っている。それを生かす。

③ 対象者に十把一絡げで対応してはいないか

ご近所では大抵は一对一の関係でサービスがなされている。それが住民の流儀だ。

④ 本人を担い手に据えようとしているか

要援護者でも、何らかの場面では担い手になれるはずだ。

⑤ 当事者との相性を大事にしているか。当事者が見込んだ人か

当事者は誰がいいと言っているのか、誰と相性が合うのかを点検する必要がある。

⑥ 当人と担い手の自然な接点を利用しているか

両者が自然に出会う所で活動を仕掛ければ、無理がない。

⑦ 双方の問題が同時に解決するよう仕掛けているか

Aさんの苦手な部分をBさんが持っている。一方Bさんの苦手な部分をAさんが持っているという関係が見つかれば、つなげるのにベストな関係といえる。

⑧ 担い手の持っている最強の力を引き出しているか

企業人ならば本業の場で使っている腕を生かす。趣味活動をしている人なら、そ

の趣味の場で生かしている腕を使えるようにする。

⑨問題解決力のある人材であるか

自治会長や民生委員、福祉委員等の人材が地域にいるが、それ以外にも天性の世話焼きの資質を持った人がいて、その人たちが実質的に問題を解決している。

⑩活用する組織、人材は本当に機能しているか

「その人たちが本来担うべきだ」と言っても、その気や能力がなければどうしようもない。肩書に振り回されないこと。

⑪既成のシステム、組織、人材と安易につなげていないか

このやり方は簡単だから、誰でも使いたがる。しかし当事者目線で見ると、そういうやり方がうまくいくとは考えられない。

⑫ご近所内の問題にご近所内の資源を使っているか

外部資源を簡単に導入しないということである。ご近所の連帯を育むためには、(外部の人でなく)ご近所の人に頼ることが大切なのだ。問題が生じるたび、ご近所外の資源を気楽に使うようでは、ご近所内の連帯は育たない。

5.担い手主導・推進者主導は改める

福祉関係者の取っている方法は、問題が出てきたら、解決につながりそうな策を既成のシステムなり制度、組織、活動の中から探し出すことだ。担い手目線、推進者目線での問題解決の方法といえる。担い手や推進する側の都合で解決策を考える。当事者や住民がそれをどのように評価するか、受け止めるかは考えられていない。

以下に、よく出てくる「取り組み課題」を十項目並べてみたが、あなたはどう思われるか。一般的に、ほとんどの項目で「妥当な考え方」と結論されるのだが、じつはこの十項目のすべてが「担い手目線」の取り組み課題なのだ。こういう取り組み課題を抽出するのなら、そもそもマップづくりの必要がない。

- 1 毎日コンビニ弁当や外食頼りの男性がいるので、会食会を立ち上げたらどうか。
- 2 自治会に加入していない人がいるので、自治会長等が訪問して入会を勧める。
- 3 この地区に福祉委員がいることを知らない人がいるので、周知を徹底する。
- 4 老々世帯で心配な家もあるので、民生委員に訪問してもらう。
- 5 ふれあいが欠けているようなので、自治会でサロンを立ち上げたらどうか。
- 6 若者世帯がいるのに高齢者と交流がない。〇〇会館で交流イベントを開こう。
- 7 一人暮らし高齢者が多いので、班長や福祉協力員などで見守り隊を編成する。
- 8 一人暮らし等で老人クラブに加入していない人もいるので、加入促進を図る。
- 9 認知症で一人暮らしの女性が気になる。民生委員がデイサービスを勧める。
- 10 区長を中心に班長、福祉委員、民生委員などで小地域福祉の推進体制を作る。

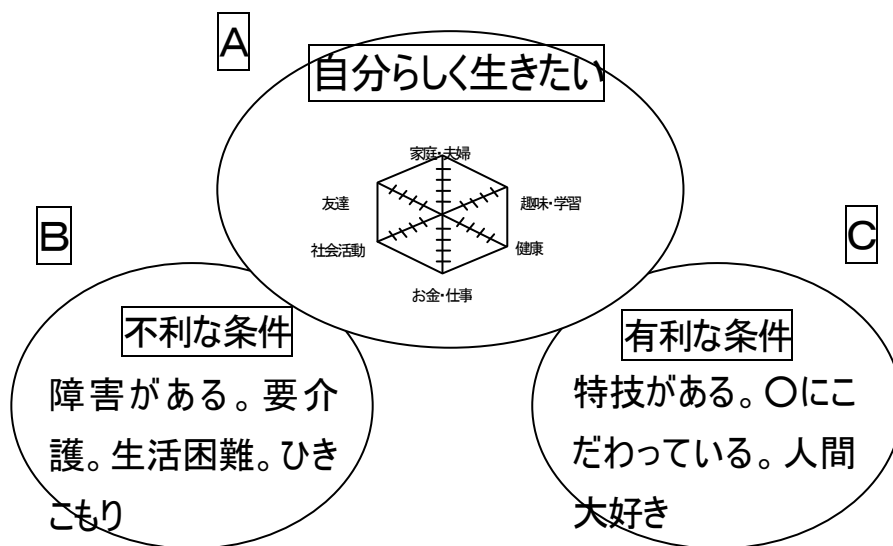
6. 「その人らしく」 応援型問題解決法

(1)福祉の目的は「その人らしく」を応援することだった

福祉の目的は「どんなに要援護になっても、住み慣れた家や地域で、安全かつその人らしく生きていけるように地域全体で支えること」と国も言っている。

(2)「その人らしくの実現」をめざす解決法の基本図

ここに「その人らしく」を主目標にした問題解決法の基本図を示そう。今までは[B]を解決するのが福祉だと考えられてきたが、本解決法は、取り組みの主たる対象を[B]から[A]に移すということである。本人の願いに即した問題解決法でもある。



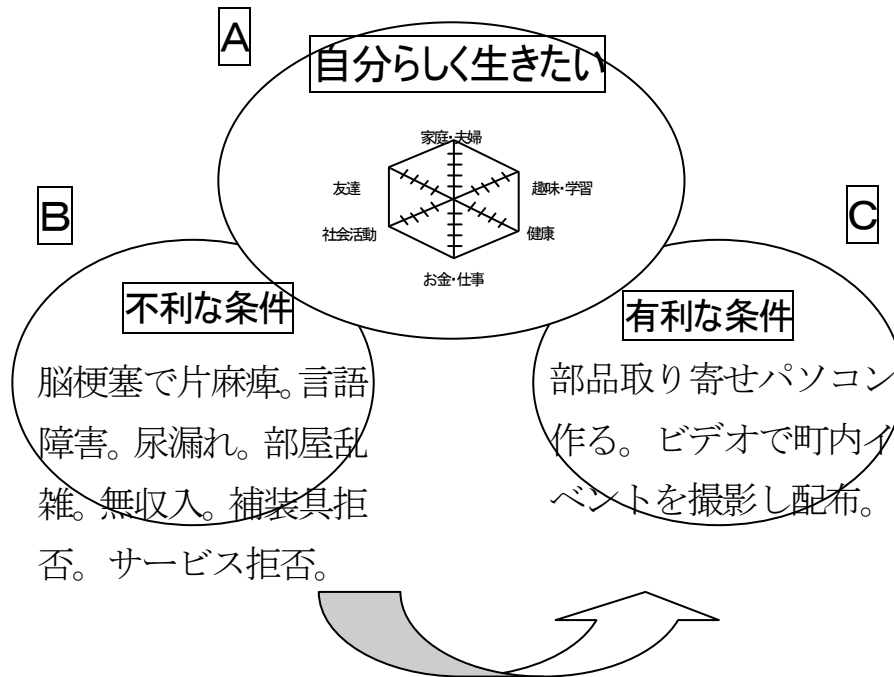
まず[A]。これが、当事者本人がめざしている「その人らしい生活」の実現という目標。本研究所ではそのための「豊かさのダイアグラム」を提示している。この6つの要件が充足され、豊かさ満開になれば、目的実現だ。

次いで[B]。その目的を果たすための「不利な条件」。福祉関係者が主に関心を持ち、取り付いている対象で、要介護、障害がある、生活が困難といったこと。

最後に[C]は、目的実現のための本人の有利な条件。特技がある、こだわっているものがある、人が好き、協力者がいる等。

(3) 「その人らしく」支援型福祉による問題解決行動の実際

一人暮らしの高齢男性。様々なハンディを抱えている。この場合のポイントはハンディに替わるたくさんの能力を持っている。これを生かせばいい。



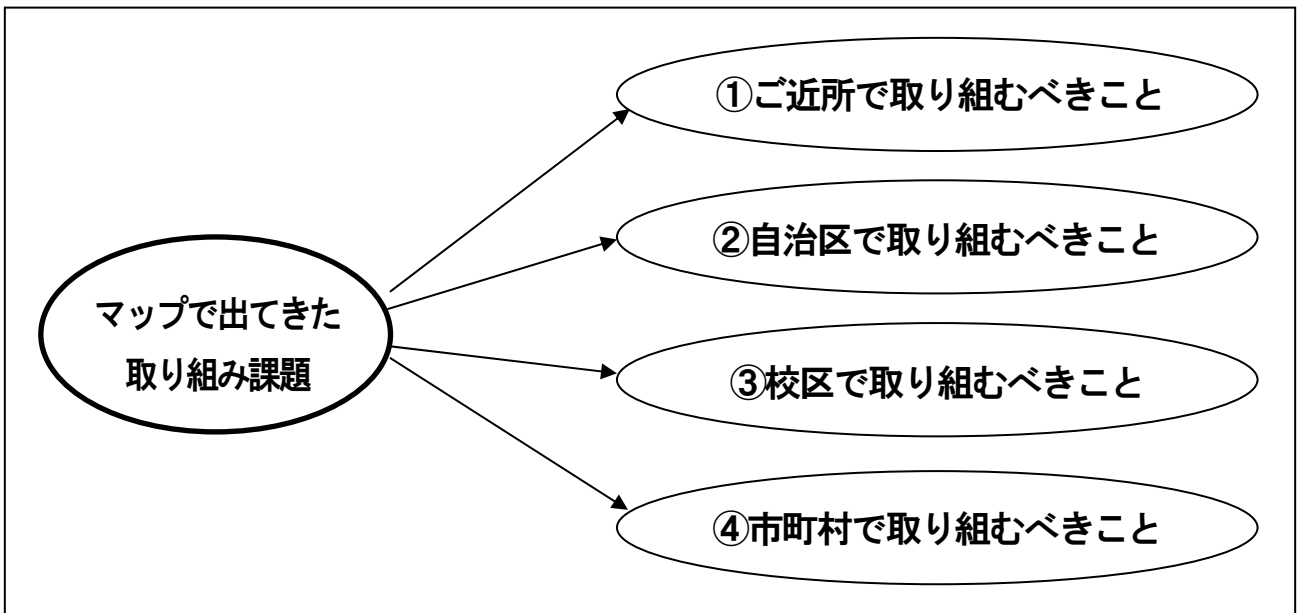
補装具拒否は本人曰く「使い勝手が悪いから」。サービス拒否は「自立意欲を失うのがこわいから」。自立志向の表れで、むしろ「有利な条件」だった。それにパソコンを組み立てる技術があるし、創意工夫が得意。ボランティア精神もある。これらを生かせないか。



- ①パソコン組み立て講座を開く(その支援)。
自宅で開催「部屋はきれいにしよう」。
- ②ビデオ講座も開ける。両講座で収入も。
- ③創意工夫の腕を生かし、片麻痺でも着脱できる補装具を関係者と開発。生活の不便も解消。
- ④町内会などがビデオ作製を有償で依頼。
パソコンの修理・請負も含めて事業に。

＜第5章＞ 課題を 圏域ごとに振り分け

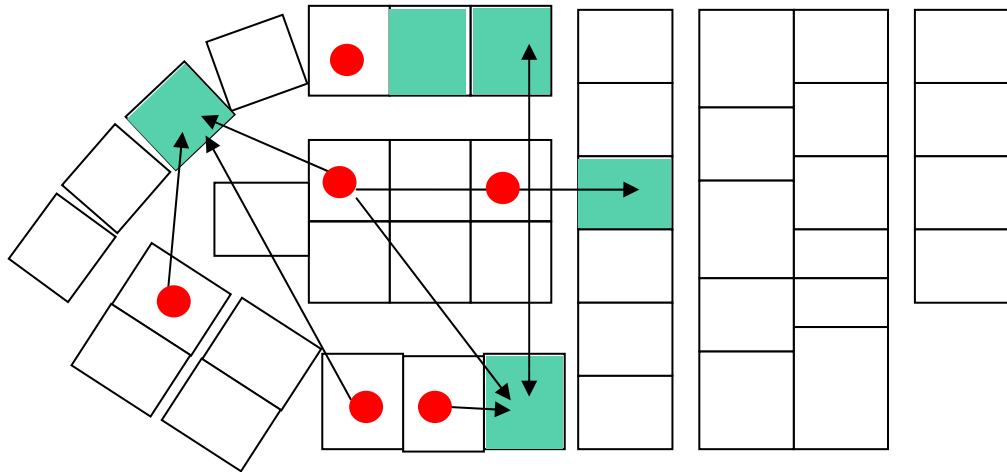
最後に「取り組み課題」をどう整理したらいいのかをまとめることにする。一言で言えば、圏域ごとにそれらを割り振るのである。



次頁のマップでは介護者を隣人達が支えている。買い物を手伝ってあげたり、庭の草取りをしてあげたりなど、介護者の周辺的な仕事を代わりにやっている。

介護中の家庭に隣人がどのように関わっているのかを線で引いてみた。隣人が気軽に関わるし、介護者がそれを受け入れていることがわかる。そして彼らの多くが、家庭介護経験者であることがわかった。ならば家庭介護経験者で介護サポート・チームをつくり、介護者を様々な面から支えられる体制を作ったらどうか。

この取り組み課題を実行するために、各圏域でどんな役割を果たしたらいいのか。これを「振り分け」と呼んでいる。



■ …介護中の家庭(線は関わる人)。介護経験者●がサポートしている。

<p>ご近所</p>	<p>①サポート・チーム作り ②ご近所福祉推進チームに移行</p>
<p>自治区</p>	<p>①傘下の各ご近所に同様の「サポート・チーム」作りを推進 ②傘下の各ご近所の連絡会、勉強会を主催</p>
<p>校区</p>	<p>①「サポート・チーム」作りを傘下の各自治会に働きかけ ②自治区の推進担当で「サポート・チーム」支援の連絡会 ③「介護をひらく」－介護の営みをオープンに。住民は介護家庭へも関与の気風作り</p>
<p>市町村</p>	<p>①「サポート・チーム」作りと活動のマニュアル作り ②関係機関による「サポート・チーム」支援連絡会を編成 ③「介護をひらく」運動のマニュアル作りと運動展開。各校区に指導 ④傘下の校区に「サポート・チーム」作り支援の指導</p>

＜第6章＞

「一般化」

(1)他の同じ問題を抱えた人への対処も一緒に考える

マップづくりの作業と言えば、要援護者が見つかり、その問題が見えてきたら、あとはその人の問題を解決するためのヒントをマップの中から探し出して、「では、こうしたら？」と提示すれば終わりとなる。

しかし①（そのご近所では）これからも同じような問題が生じる可能性がある。②すでにその問題を抱えている人もいるだろう。③他のご近所にも同じ問題で困っている人がいるはずだ。

そこで、これらのケースについても一緒に対処法を考えていくことを、「一般化」と呼ぶことにする。

①買い物が不便という悩みにどう対処するか？

北陸地方の過疎地で支え合いマップづくりをした。そこで出てきた住民の困り事の1つが、買い物や通院に不便だということであった。試しにマップ作りの場に来た人たちに、では住民はこの問題に個々でどのように対処しているのか聞いてみた。

その結果が、次に紹介するマップである。買い物や通院に不便をしている人に印をつけてもらったら、50世帯程度のこのご近所に15人いることが分かった。

次いでこの一人ひとりについて、どのように対処しているのかを調べてみた。驚くべきことに、マップづくりに参加した人（5人程度で、全員男性）は、この問いにほぼ完全に答えることができたのである。以下に並べてみよう。

- ①息子や娘が時々やってきて、そのとき買い物に行ってくれる。
- ②生協が、頼んだ品物を持ってきてくれる。生協と書いた所に車が止まる。
- ③ご近所に1つある店が、欲しい物を取り寄せてくれる。
- ④移動販売を利用。
- ⑤電車で都市部に買いに行く。そのために自宅から15分ぐらい歩いて駅まで行く。
- ⑥親しい隣人がついでに買ってきてくれる。

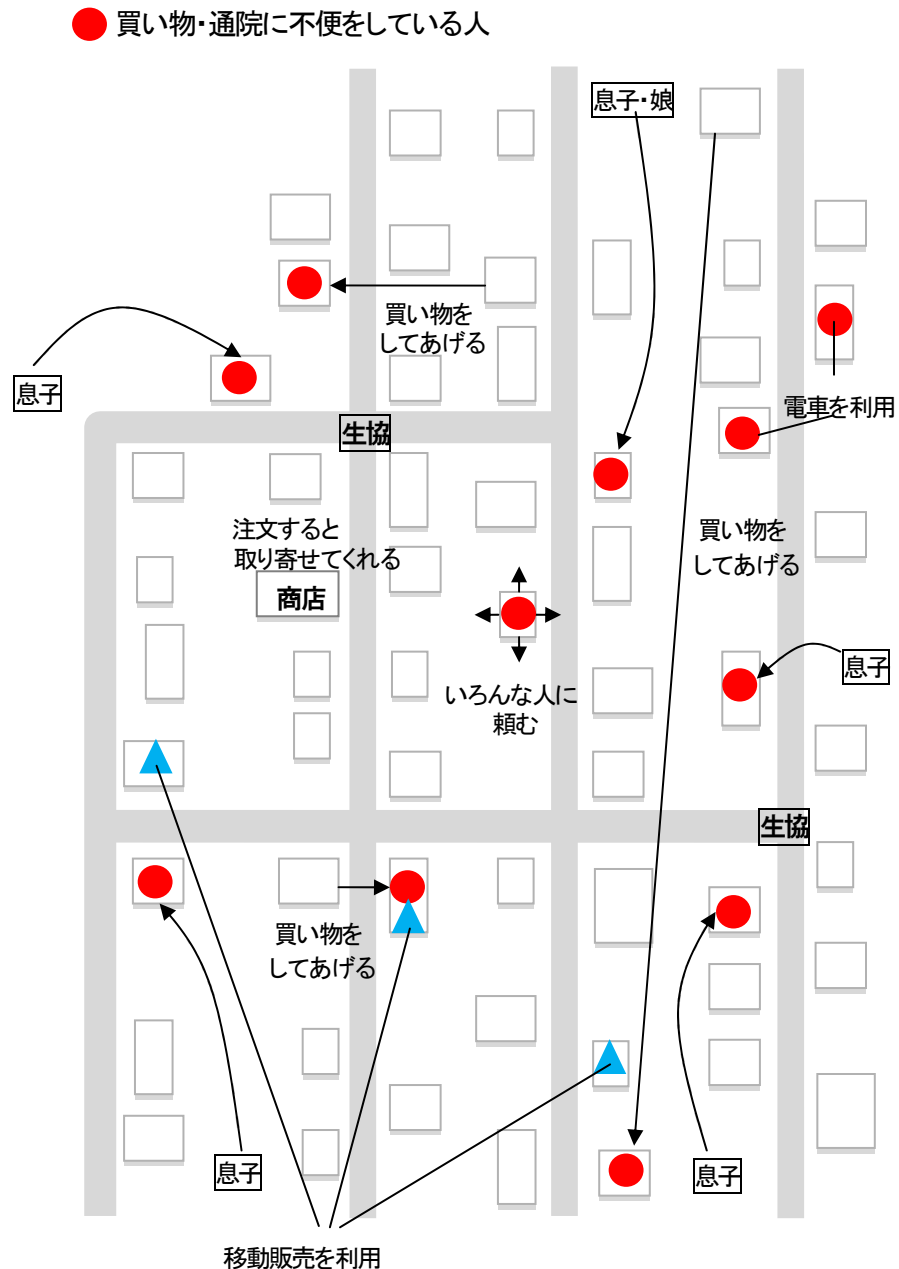
⑦その都度、近くの誰かに声をかけてお願いします。頼み上手さんだ。

住民(当事者)一人ひとりが開発した問題解決策が少なくとも7つは発掘できた。あとは、これを上手に生かせばいいのだ。

これから新たにこのニーズを抱えた人が出てきた場合、本人の好むやり方や周囲との人間関係などを勘案して、ベストの対策方法を考える。

例えば本人に、この要望に応じてくれる親しい隣人がいない場合、ごく近くに他の人の買い物をついでにしてあげている人がいたら、その人に「〇〇さんの分もついでに買ってあげられませんか？」と聞いてあげる。「いいですよ」と言ってくれば、その人に頼む。余力を調べるのだ。

こういうニーズと資源を上手に結び付けるコーディネーターがいたら効率的だ。ニーズの種類ごとに得意な人が担当すればもっといい。買い物支援コーディネーターとか。この人材は、常にご近所内の当事者がだれにどのようなお願いをしているかの情



報を持っていて、その結果、「〇〇さんは、あと数名の買い物支援をやってあげられる力を持っている」といった余力情報も蓄積しておく。

(2)自治区、校区、市町村域を生かして全域に普及

前掲の7つの方法は、他のご近所でも使える可能性がある。全地区で使えるようにするために、自治区が傘下の特定ご近所で考え出された解決策を、他のご近所にも伝える。次いで校区が傘下の特定自治区で使われているこの方法を、他の自治区にも伝える。さらに市町村域が、傘下の特定校区で広がっている手法を、他の校区にも伝えるという方法で、市町村の全域に伝わる。

ちょうど、「介護サポート・チーム」作りについて、各圏域に振り分けるというのが、これに該当する。振り分けを別の言い方をしたに過ぎない。

(3)ご近所でできないものを自治区で受け止め

もう一つ、一般化に似ている発想がある。ご近所の問題は基本的にはご近所で解決するように努力する。しかしご近所では解決が難しい問題については、上層圏域である自治区で対応する。自治区でも難しい場合は校区で対応する。そして校区でも難しい場合は市町村域で対応する。

自治区で対応する場合、特定のご近所のためというよりも、どのご近所でも使える策である場合が多いのではないか。こういうのも一般化と言っていいかもしい。

ただ、この一般化をあまり安易に使うと、せっかくご近所主導で助け合いを進めようというのが台無しになってしまう恐れもある。それぞれのご近所で対応した方がいいというのは、その方がご近所の実情に合った解決策になるからでもある。他方、どのご近所でも使える方法は、実際にご近所で使おうとする場合に、何がしかの不具合が生じる可能性もある。またせっかくご近所の助け合い力を強めるためになるべくそのご近所内で努力しようという意図も薄れる。自治区で解決してくれるようになると、ご近所が努力をしなくなる。そのような恐れがあることを頭に入れた上で、この「一般化」手法を採用する必要がある。

<第7章>

マップ作りのまとめ

(1)まとめの留意点

①「まとめ」はマップ作りの場で

マップ作りが終了した時点で、その場である程度のまとめをする。後日になると、大事なことも忘れてしまっている。

②マップで発見した住民の興味深い活動も

取り組み課題をまとめる前に、マップで発見した興味深い活動も整理しておく。住民は既に一定の活動をしているのだから、それを整理するのが先決。

③取り組み課題は問題と解決策の2面から

「取り組み課題」とは「問題」のことだけだと誤解している人が多い。そうではなく、「問題」と「解決策」の2つのことである。

④課題抽出は「気になる人」と「気になること」の2点から

この中の「人」にはばかり関心が向いているが、むしろ大事なのは「こと」の方である。地域課題にもっと目を向ける必要がある。

⑤ご近所、自治区、校区、市町村域の役割分担にまで

ただ課題を出すだけでなく、4層のどこがどういう役割を果たすべきかまで整理する必要がある。

2.マップで発見した興味深い活動

支え合いマップづくりはただ課題を抽出するためだけではない。住民は既にある程度の助け合いを実行している。その中には、あっと驚くような活動、なるほどと感心させられる活動、こんな人がこんなことをとといった意外な活動などもある。住民だけでなく、福祉関係者の興味深い活動を発見する場合もある。

そこで、マップづくりを終えた後、この角度からも、気づいたことを記録し、まとめてみたらどうか。

①住民（主に担い手）の興味深い活動とその内容、意義

--

②当事者の興味深い活動とその内容、意義

--

③保健福祉機関（ワーカー）の興味深い活動とその内容、意義

--

④その他、住民や関係者の活動で興味を引いたこと

--

3.マップで出てきた取り組み課題

その地域を、より良き福祉のまちにするための取り組み課題を整理してみよう。「気になる人」と「気になること」の2種類ある。「人」にばかり関心が向くが、「こと」の方にももっと目を向けよう。「取り組み課題」とは問題と解決策の2つ。

(1)「気になる人」の取り組み課題（問題と解決策）

<①見守り、②困り事への対応、③介護・ケア、④豊かな生活支援など>

(1) _____ さんへの対応

①気になる状況（課題）

②対応策

①向こう三軒両隣・班・ご近所に対応すべきこと

②自治区で対応すべきこと

③校區で対応すべきこと

--

④市町村域で対応すべきこと

--

(2)「気になること」の取り組み課題（問題と解決策）

以下の3点について、気になる理由と解決策をまとめる。ここでもご近所、自治区、校区、市町村域の4層に分けて解決策をまとめる。

①「気になる要援護者」の共通課題と解決策

<①見守り、②困り事への対応、③介護・ケア、④豊かな生活支援>

②住民の生活課題と解決策

<①買い物・通院が不便、②交通事故の危険、③若者不足で行事ができない等>

③「福祉のご近所づくり」への課題と解決策

<①住民の交流がない、②世話焼きさん等の人材不足、③障害や病気を隠す風潮、④当事者の自助力不足、⑤住民と関係機関・民生委員等の連携不足等>

(1) _____ の問題

①気になる状況（具体的に）

②対応策

①向こう三軒両隣・班・ご近所に対応すべきこと

②自治区で対応すべきこと

--

③校区で対応すべきこと

--

④市町村域で対応すべきこと

--